近衛家凞が讀んだ漢籍鈔本

松尾肇子

一、はじめに

五攝家筆頭の近衛家には國寶『御堂關白記』をはじめとして多數の典籍が傳來し、現在は一般財團法人陽明文庫が繼承保存している。また陽明文庫設立時に京都大學に寄贈された二一九部三一五〇冊は、近衛文庫として京都大學附屬圖書館に收藏されている。[1] 就中、漢籍は陽明文庫に約二百點、近衛文庫に約百四十點。萬をもって數える典籍資料のなかでは微々たる點數だが、近衛家という家柄に相應しく、思想、歷史、類書、藝術などを對象とした、極めて正統的な集書であり、また善本が多い。[2] その大部分は江戸時代、第二十一代當主近衛家凞（一六六七～一七三六）の集書に係ると言ってよい。

家凞は近衛家當主としては當然のことながら朝儀に與り、關白、攝政と累進したばかりでなく、文化人としても尊敬を集めた。必須の教養であった和歌・漢詩はもちろん、學者としては律令を研究して『大唐六典』の校訂刊行があり、茶人としては『茶湯之記』に三百八回の茶會を記錄し、茶杓のコレクションを殘し、繪では精緻な『花木眞寫』を描き、書では『大手鑑』を制作して國寶に指定されている。能書家として最も有名で一家言を持ち、[3] 昭和十年（一九三五）には「近衛家凞公遺墨展覽會」が京都博物館において開かれている。[4] 家凞のコレクションには家凞好みと稱される美しい表裝がしばしば見られる。鈔本においても打曇りや空押し、雲母引きなどの裝飾的な表紙をつけるものが多く、その筆跡の美しさを賞贊されても、[5] テキストに言及されることはあまり無いようである。しかしその書物としての價値は決して小さくはない。

本稿では、まずその生涯を概觀した後、家凞が關わった漢籍の鈔本のなかからその全部を鈔寫したものを紹介して、家凞の集書と漢學の一端を見たい。

二、家凞の略傳と集書

家凞の生涯は、綠川明憲氏がその綿密な調査で書きあげた大冊『豫樂院鑑　近衛家凞公年譜』（勉誠出版、二〇一二年）によって明らかにされた。以下に、綠川氏の成果によって家凞の略傳を示す。

家凞は寛文七年（一六六七）六月四日、第二十代當主近衛基凞（一六四八～一七二二）の第一男兒として誕生した。母は品宮常子內親王（一六四二～一七〇二）で、前年に姉の凞子（一六六六～一七四一）が生まれている。母方の祖父は後水尾院（一五九六～一六八〇）[6] である。延寶七年（一六七九）十三歲で靈元院皇女の憲子內親王（一六六九～八八）と婚姻。同母姉の凞子も同年、甲府藩主の德川綱豐（一六六二～一七一二、後の六代將軍家宣）との婚姻により、江戸へ向かった。憲子內親王は天和三年（一六八三）十二月に降嫁し、嫡子の家久を出產したが、その翌貞享五年（一六八八）四月

に病没した。のち元祿十年（一七〇三）には母の上臈だった女性が家凞に奉公先を變えておつま（一六八四～一七一五）と改名し、男女七人の子をもうけることとなる。

さて、家凞は延寶元年（一六七三）十一月に七歳で元服すると卽日從五位上に敘せられたのを初めに、貞享三年（一六八六）三月二十歳で內大臣、元祿六年（一六九三）八月に右大臣、寶永元年（一七〇四）一月に左大臣、同四年（一七〇七）十一月に四十一歳で關白に任ぜられた。同六年（一七〇九）六月、東山院が讓位し（十二月十七日崩御）まだ九歳の皇太子が中御門院となると、家凞は攝政となり、正德二年（一七一二）八月四十六歳までの五年間、攝政と關白をつとめた。この間、關白となって間もない寶永五年（一七〇八）閏正月には富士山が噴火、三月八日には京都に大火が起こり、御所は燒失。家凞は騎馬してかけつけ東山院を避難させ、鎭火ののちも近衞邸を假皇居とし避難先の確保や御所の再建にあたった。翌寶永六年（一七〇九）一月に將軍綱吉が死去すると、その養嗣子となっていた家宣が五月に六代將軍宣下を受け、姉の凞子は御臺所となった。一方、朝廷でも中御門院が卽位したことは先に述べた。卽位式は翌七年十一月に行われ、さらに翌年の正德元年（一七一一）一月一日の院の元服式では家凞が加冠をつとめた。卽位式及びそれに續いた元服式も、江戸からきた新井白石（一六五七～一七二五）が拜見できるよう取り計らっている。[7] ちなみに新井白石は、家宣がまだ甲府藩主であった元祿六年（一六九三）から侍講として仕えていた。

攝政關白を辭任した後もしばらくは忙しく、正德二年（一七一二）八月、將軍家宣の薨去にともなう第七代家繼の將軍宣下に際して、翌年三月江戸へ下向、四月の宣下後もしばらく滯在して新井白石らと交流した。姉の凞子は天英院と號して七代將軍家繼の母（生母は喜與方）として江戸城に殘った。家凞は五月に歸邸ののち隱居所である河原御殿に移り住んだ。

將軍家では享保元年（一七一六）四月末に家繼が薨去、五月に吉宗が江戸城本丸へ入った。京都では、おつまの二人目の子の尙子が十一月に中御門院女御となり、同五年一月一日今出川の近衞邸において、第一皇子を產んだのち、二十日に薨去した。享保六年（一七二一）前後から家凞は『大唐六典』の校合を開始している。同七年九月父の基凞が死去。享保十年（一七二五）十二月二十四日、五十九歳で出家し、豫樂院眞覺の法號を名乘る。同二十年（一七三五）二月六十九歳の家凞は、准三后の辭退と、輿での參內、宮中での杖が許された。三月、中御門院から櫻町院へ讓位が行われた。家凞にとって櫻町院は外孫である。四月には櫻町院より、新年號の文字に關する內々の敕問が下されている。そしてその改元のあった元文元年（一七三六）十月三日、七十歳で薨去した。家凞の在世期間は、中國では明が滅亡して六年後の淸の康熙六年から乾隆元年まで、盛んに文化事業を行った康熙帝および雍正帝の在位期間にほぼ重なる。近衞家では家凞薨去の翌年に家久も世を去り、內前が當主となった。家凞の生前に出版されなかった『大唐六典校訂』は、松下見櫟・堀南湖らによって完成を見、元文四年に刊行された。

以上の家凞の生涯からは、その集書に近衞家の資金力[8]と人脈とが大いに力を發揮したことが容易に推察できよう。好學の將軍家宣と新井白石の存在は大きく、『豫樂院鑑』によれば正德元年（一七一一）七月には將軍家宣のもとで完成した『漢隸字源』『李嶠雜詠』『新儀式』等の新寫を、江戸滯在中の父の基凞が受け取っている。ほかにも幕府や林家の藏書を鈔本として入手することができたであろう。またこれに先だって寶永七年（一七一〇）十一月、中御門院の卽位式のために京を訪れた新井白石は、江戸に戻るとすぐに嘉靖本を底本とする鈔本『大唐六典』を家凞に送っており、[9] 正德三年（一七一三）家凞が江戸に赴いた際には、書物を貸借している。

一方、薩摩や長崎經由の集書はかなり早くから記録されている。元祿十六年（一七〇三）六月二十日、長崎の大通詞が來邸、『詩經』『古文前集』などを見、また同年七月一日、島津綱貴から明・英宗正統帝筆の『大學碑』を贈られている。下って正德四年（一七一四）十月三日には、琉球の程順則を介して淸・閩南の儒者王登瀛に揮毫を依頼していた「物外樓」額が屆き、河原御殿に建てた樓に掲げている。程順則（一六六三～一七三五）は琉球の士族で、淸國福州の陳元甫に學び、王命により首里の官制などを整理編纂した儒者である。この時は、先に江戸において、福州で私費刊行した淸・范鉉撰『六諭衍義』を鹿兒島藩主島津吉貴に獻上している。[10] 家凞と吉貴とはこの二年前にそれぞれ長子家久と娘滿姫を結婚させた閒柄である。のち享保九年（一七二四）頃に程順則が「楷盃」を家凞に贈っており、『槐記』には享保十二年（一七二七）二月五日に琉球人の物外樓の詩文をそばの者たちに見せたことが記録されている。正德四年の琉球の慶賀使謝恩使は、江戸の德川家宣および新井白石と繫がるものでもある。[11]

京都でも、『大唐六典』の會讀に加わった侍醫の山科道安の日記『槐記』に記されたところでは、會讀に集った人々が所藏書を御覽に入れたり書商[12]が出入りしたり、御物や寺院から書物を借り出している。[13] なかでも『典籍便覽』を御覽に入れた堀南湖正藏は、『大唐六典考訂』の完成・藏板に多大の貢獻をした人物で、本名を正脩（一六八四～一七五三）、廣島藩[14]から尾張藩へ移った儒者の堀正意（杏庵）の曾孫である。[15] 南湖は廣島藩儒であり、京都にあって伊藤仁齋・東涯や堯恭法親王らとも交流しており、彼ら在京儒者のネットワークも集書を助けたであろう。

三、漢籍鈔本紹介

家凞が收藏したと思われる漢籍鈔本を以下に紹介する。漢籍鈔本には、全册を鈔寫した本のほか、叢書中の一本、あるいは序・目錄または必要箇所などを拔萃した本、一定の方針にしたがって抄出した文章を編集した雜纂本があり、それらには、外題が無かったり略記されたり、また藏書印が無く、自らのノートとして使用したと推測されるものもある。本稿では紙幅の都合により全册鈔本および家凞が獨自に外題を附して一本として扱った拔萃本の一部を合わせて紹介する。金錢的に豐かな家凞は、購入できる書籍であれば購入して備えたので、全册鈔本は當時入手困難な書物であったと考えてよく、現在の他館收藏狀況を見てもそのことは窺える。[16] 美しい裝丁がなされているものも少なくなく、用紙は楮紙が多いが、打紙などの高級紙や匡郭・版心が印刷された稿紙を用いることもある。上頭に校字が記されているものが多數ある。

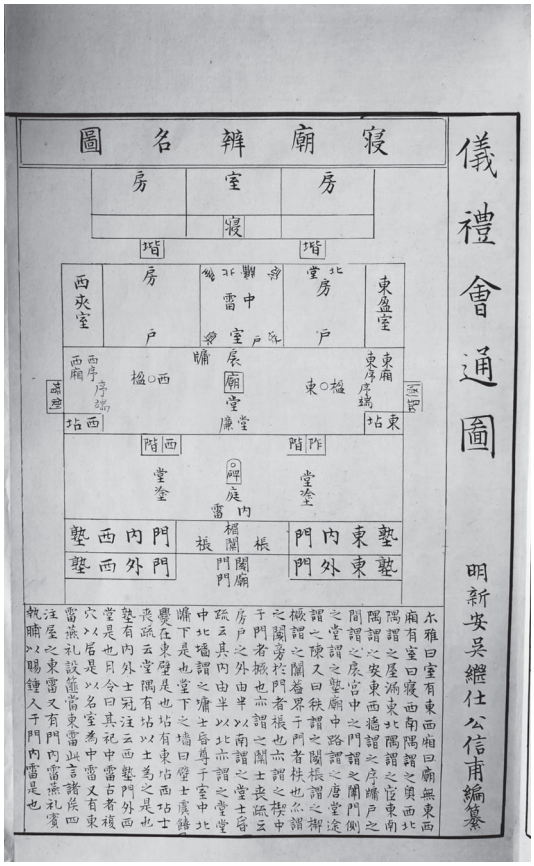
以下の記載は四部分類に依った。また家凞の自鈔か否かを記載し、「寄合い書き」は家凞の自筆を含むことを、「他筆」は家凞自筆部分が見られないことを示す。その場合も、家凞筆の外題が施されたり、彼の藏書印が押されていたりすることで家凞の關與が確認できる。家凞藏書印は數種あるが、多くは「陽／明／藏」（／は改行）の白文方印が首葉上頭に捺されている。以下の紹介では、「陽／明／藏」白文方印とのみ記す。また注②に擧げた『近衞家名寶からたどる宮廷文化史』に芳村氏による詳細な紹介と書影があるものはその頁を示すので、御覽いただきたい。なお、小字で記された部分は〔　〕で表記し、斷句および（　）の年號は筆者が施した。

（1）儀禮圖式一卷、一冊、明・吳繼仕 編纂、キ／66

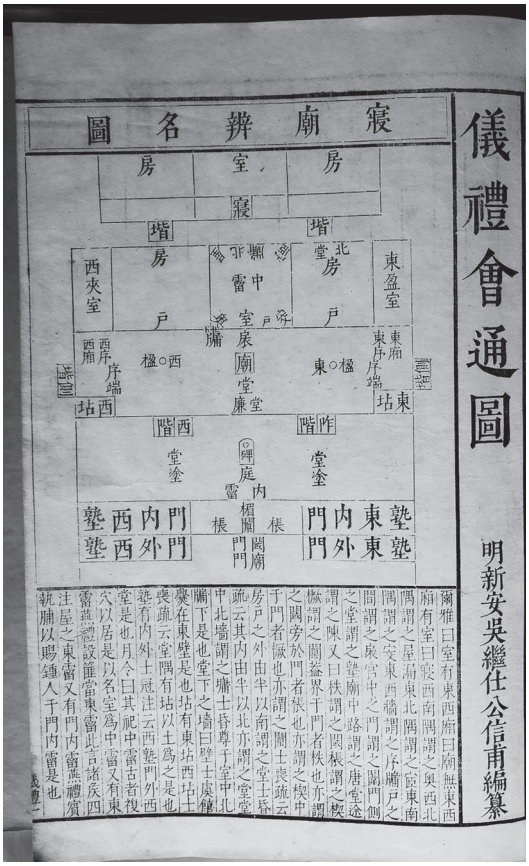
本文は半葉十六行、行三十二字。書名は家𤣥筆の外題による。桃色表紙（四三・八×二七・〇糎）に黄色の角裂を配し、序および本文の一部は家𤣥筆。「陽／明／藏」白文方印。目録末に「新安吳氏熙春樓藏板」とあり、萬曆四十三年に吳繼仕が刊行した『七經圖』のうちの「儀禮圖」を鈔寫したもの。ただし、第十五～三十葉および第三十一葉「會同見諸侯圖」の圖と本文、第三十八～五十二葉表および裏「俎圖」が缺けており、底本に缺葉があったのだろう。『槐記』享保十四年八月二十四日の記載によれば、その底本は御物であった。「六經圖ト云モノハ、類書ノ中ニモアリ、又大ニ本ノハナレモノニモアリ、世上ニカクレナキモノ」であるが、『七經圖』は珍しく「此書ハ御所ノ御文庫ノモノニテ、近代ニ儀禮圖の一冊ヲ添エタルモノナリ、ミナ類聚シテ便約ナルモノナリ、晝夜コレヲ御自筆ニテ寫サル（自注:御所ノ御物故ニ人手ニ掛ケラレズ）」という。この自注によればすべて家𤣥自筆鈔本のはずであるが、實際には他に一人乃至二人の筆が認められる。ちなみに陽明文庫には「陽／明／藏」白文方印の家𤣥藏書印のある萬曆四十三年序刊の『七經圖』を收藏しているが、その收藏はこの記事より後のことになる。

（2）國朝五禮儀八卷 十冊、國朝五禮序例五卷、四冊、朝鮮・姜希孟 等撰、コ／116、序例コ／115

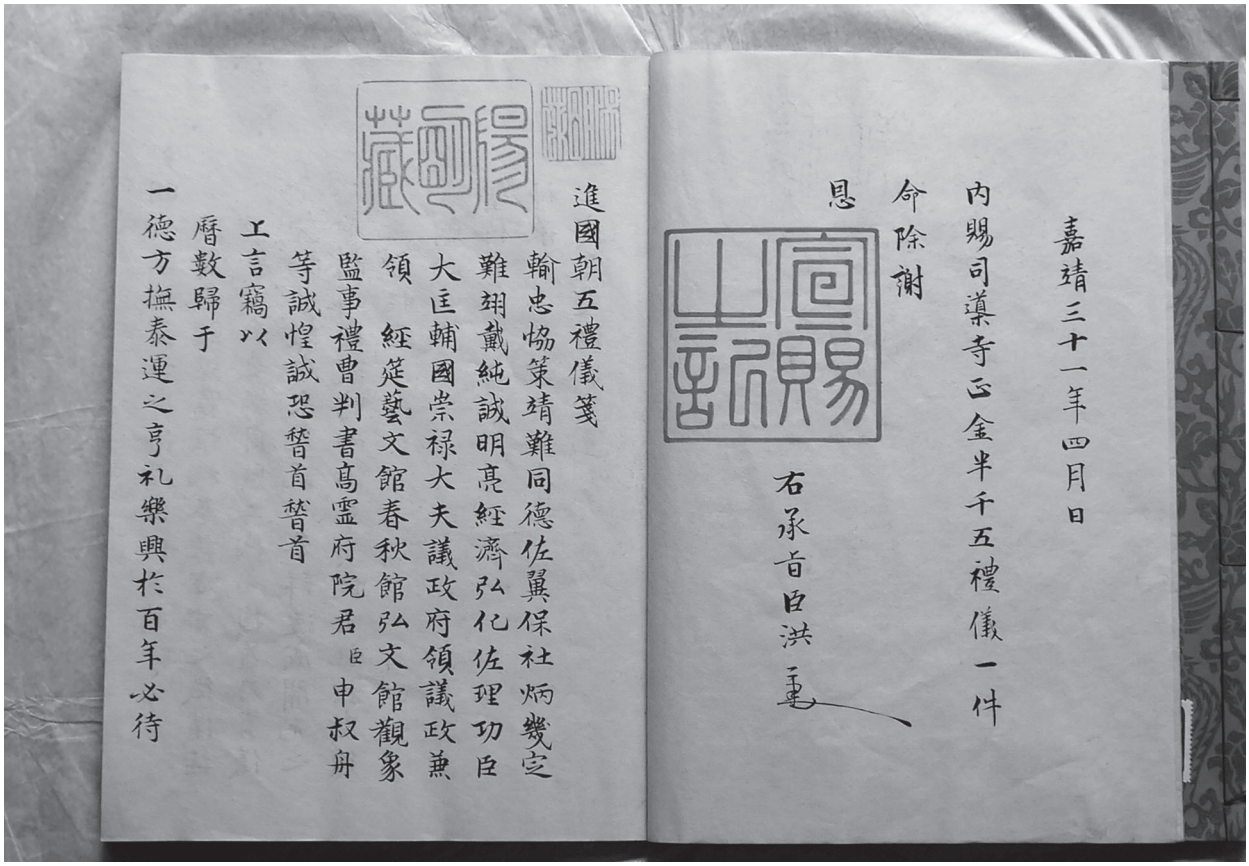
半葉十行、行十九字、序例は行十七字。薄青地に松葉色の鳳凰花文の空押しの表紙（二九・二×二〇・九糎）に山吹色の題簽、外題「五禮儀」および「五禮序例」の打附け書きは家𤣥筆。「陽／明／藏」白文方印。李氏朝鮮の諸禮を定めた書物である。見返しに「嘉靖三十一年（一五五二）四月日內賜云々」と「宣賜之記」朱文方印が寫されている。陽明文庫には乙亥字印本の明宗七年（一五五二）四月日內賜刊本『國朝五禮儀』も藏す。[17] それを鈔したものか。寄合い書き。



（1）儀禮圖式會通圖鈔本



（1）儀礼圖式會通圖明刊本



(2) 国朝五禮儀宣賜記

(3) 千字文音決一卷、一冊、229／21、（芳村氏二三八頁、書影二四一頁）

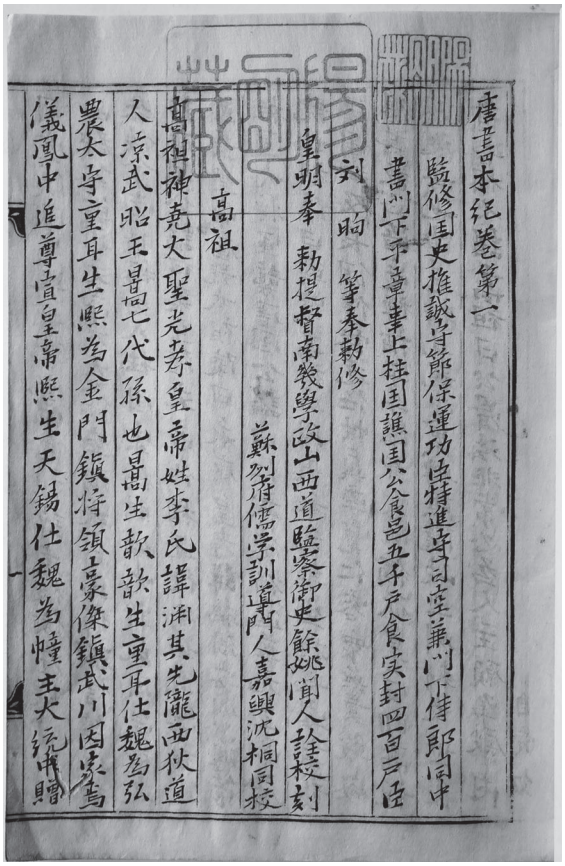
半葉六行、音決并序は行十二字、梁・周興嗣の「千字文」は一行に二句八字。墨流しの香色表紙（二二・七×一六・七糎）に朱色の絲。鳥の子紙の粘葉裝。奥書に「茲是千字文音決／并序得見古本謄寫之／貞永天福之頃手書也／不知誰人最殊勝之書也、元祿七年閏五月朔日」とあり、家凞が鎌倉時代の古鈔本を鈔寫したことが分かる。日本における千字文の古い讀みを傳える孤本として知られ、朱筆の聲點及び藍筆の校記のほか、家凞の書入れがあり、第一葉には朱筆で「葛玄五千文〔見太平御覽書目〕」「事物考曰千字文梁周興嗣千字文、劉後村曰法帖中漢章帝已嘗書此文殆非梁人作也」「獨異志〔下卷〕〔梁周興嗣爲散騎常侍聰明多才思武帝出／千言無章句令嗣次之因成千字文歸而兩目俱喪及死開視之心如掬燥泥〕」、また貼紙一枚に「千字文一卷〔蕭子範撰〕又〔周興嗣撰／演千字文五卷〕〔無名氏〕〔舊唐書經籍志／廿六卷十四丁〕」とある。

(4) 新刻增校切用正音鄉談雜字大全二卷、二冊、キ／63、（芳村氏二三八頁、書影二四一頁）

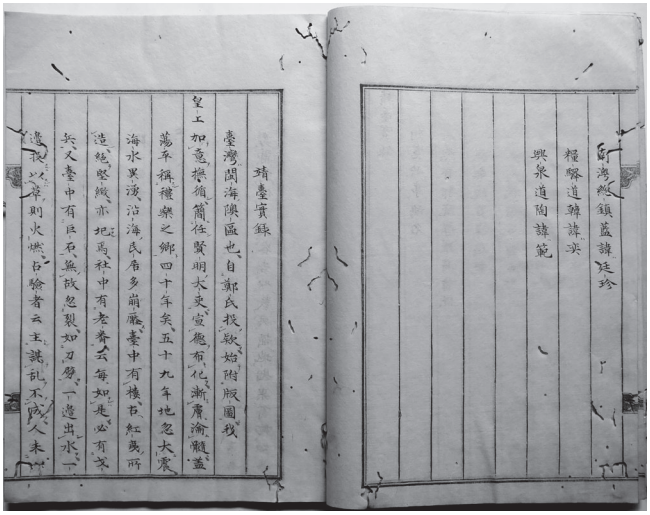
半葉十一行、行二十四字。櫻色地に朽葉色の草花文の表紙（二八・一×一九・五糎）に打附け書きの外題「鄉談正音」は家凞筆。本文は他筆。「陽／明／藏」白文方印。見返しに「增補漢語鄉談／（小字）乙卯歲澄邑書林郭柳之重梓／正音雜字全集」とある。芳村氏によれば、明末に廣東で刊行された方言と官話とを分類集成した語學書で、他に見ない書物である。

(5) 〔舊〕唐書二百卷、五十八冊、後晉・劉昫 等奉勅撰、明・聞人詮校、ク／56

半葉十一行、行二十一字。「陽／明／藏」白文方印。香色の表紙（二六・〇×一八・七糎）に打附け書きされた「唐書」の外題は家凞筆。唐の歷史を記した正史。明嘉靖刊本を底本とする。四周雙邊・白口・雙內向黑魚尾および單黑魚尾の二種類の稿紙を使用。多數に分擔させ、急ぎ鈔寫し



(5) 舊唐書

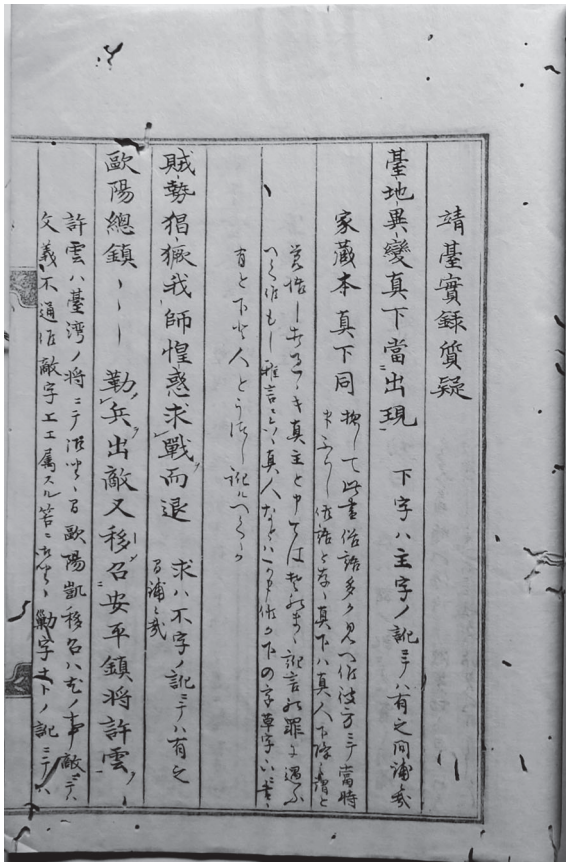


(6) 靖臺實錄

た様子が窺われる。ただし、三種の序はそれぞれに筆鈔者が異なるものの、いずれも家淵によく似た文字で丁寧に寫され、薄手の楮紙に匡郭界線も筆鈔している。全體にわたって、家淵ほか複數の手による朱墨の校字が多く見られ、脫文を補鈔した葉が綴じ込まれており、校訂後に製本されたことが分かる。陽明文庫にはまた家淵手鈔の外題『舊唐書　序目（以下、各冊職官志一／二／三／輿服志／禮儀志一二／三四／五／六七）』（ク／61）とする『舊唐書』からの拔萃本九冊があり、その「職官志」及び「輿服志」の部分には、上頭に項目を藍筆で書すほか、「六典作某」の對校が多數見られる。

（6）靖臺實錄一卷、一冊、清・黃耀烱 撰、質疑一卷、セ／78

稿紙を用い、半葉八行、行二十一字。雲母をひいた香色表紙（二八・二



(6) 靖臺實錄質疑

×一九・六糎）に外題を家淵が打附け書きにする。本文も家淵筆。朱の斷句、郭外上頭に朱の校字、また全文に返り點送り假名を附す。「質疑」が附録されており、原文の當該箇所について漢字片假名交じり文の日本語で記されている。「家藏本」との記載があるが不詳。

（7）靖臺實錄一卷、一册、清・黃耀烱撰、鄭氏投款一卷、セ／79

半葉九行、行二十一字。肌色地簀の子漉文様表紙（二九・二×二〇・二糎）をつける。打附け書きの外題および本文とも家淵筆。人名に朱引、郭外上頭に朱の校字および墨の語注、また全文に墨の返り點送り假名を附すが、前書（6）と必ずしも同じではない。「靖臺實錄」の後に、「廣輿記」から「臺灣府」の抜き書き、「福建地理之圖」、「鄭氏投款」を附録する。「投款」は漢字片假名交じりで記されており、一字下げて「林道春云」の引用がある。

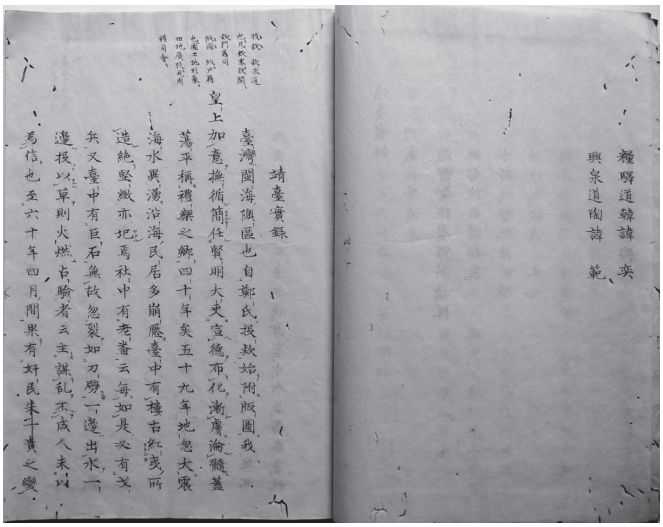
以上二本の『靖臺實錄』は臺灣征服の次第を記した書物。內閣文庫の紅葉山文庫に清刊本があるが、質疑や鄭氏投款の底本は不詳。

（8）（9）歷代圖、レ／11、レ／12

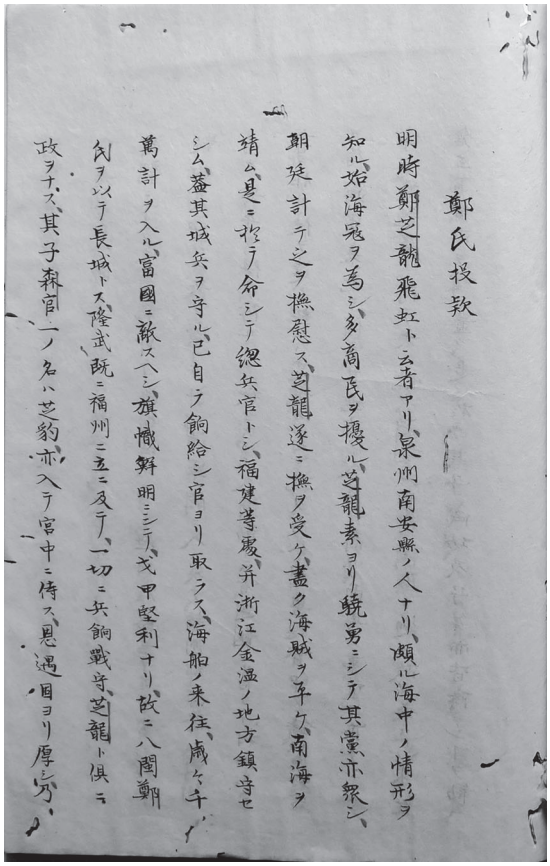
半葉十一行、行二十五字程度。レ／11には五針眼で藍表紙（二八・八×二〇・九糎）を、レ／12には蒸栗色に波刷毛目の表紙（二九・二×二一・二糎）を大和綴じで施している。伏羲から明・思宗すなわち崇禎帝までの皇帝名および小字雙行で在位年數と元號を記す。兩本は同本。レ／12は『白石日記』寶永四年十一月廿九日に見える「歷代圖」か。他筆。

（10）三國史記五十卷、二十册、高麗・金富軾等撰、サ／65

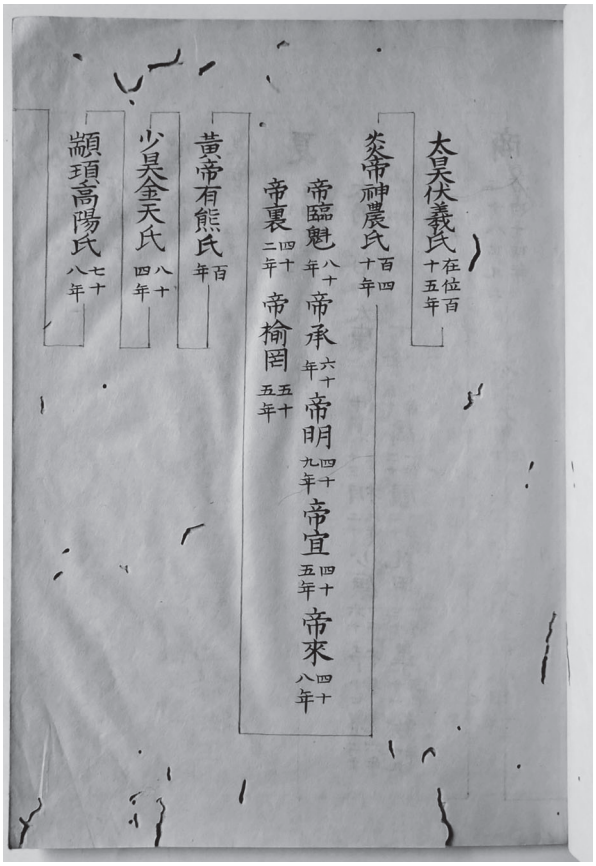
半葉八行の稿紙を使用し、行十八字。裏柳色地に青丹の花草紋の表紙（二九・三×二一・〇糎）に打附け書きの外題は家淵筆。「陽／明／藏」白文方印。高麗・仁宗の敕命により、紀傳體で書かれた、新羅・高句麗・百濟の三國の歷史書。太祖三年甲戌年金居斗跋のみを存する。「三國史記」の外題・目錄・跋・卷三十二祭祀は家淵鈔。



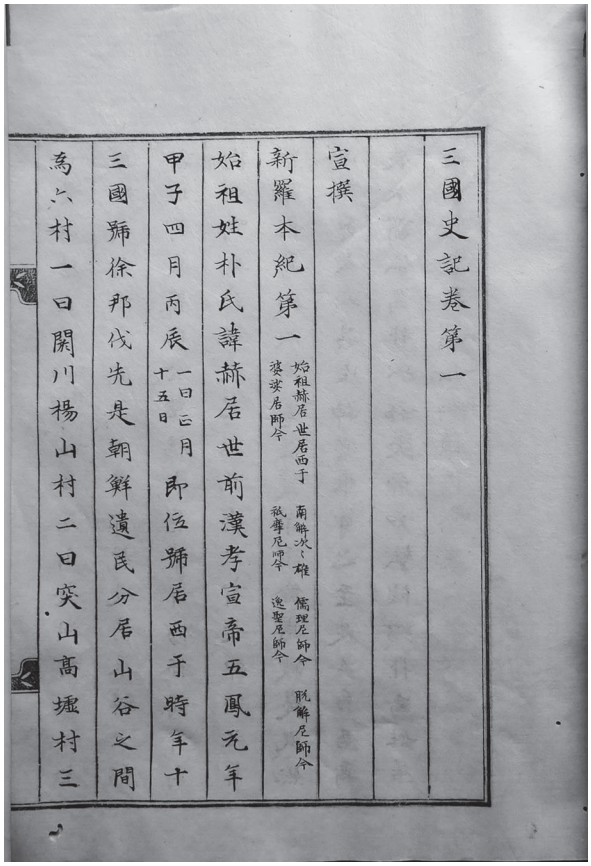
（7）靖臺實錄



（7）靖臺實錄鄭氏投款



(8) 歴代圖（レ 11）


三國史記卷第一

宣撰

新羅本紀第一 始祖赫居世居西干 南解次次雄 儒理尼師今 脫解尼師今 婆娑尼師今 祇摩尼師今 逸聖尼師今

始祖姓朴氏諱赫居世前漢孝宣帝五鳳元年甲子四月丙辰 一日 三月十五日 即位號居西干時年十三國號徐那伐先是朝鮮遺民分居山谷之間爲六村一曰閼川楊山村二曰突山高墟村三

(10) 三國史記

(11) 廣東新語二十八卷、十二册、清・屈大均 撰、カ／52

半葉十行、行十八字。香色表紙（二三・三×一六・二糎）。「陽／明／藏」白文方印、また「陽明文庫」墨長方印。清國廣東地方の風俗物産等を記した書物。外題および本文とも他筆。封面に「番禺屈翁山先生撰／廣東新語／木天閣繡版」とあり、康熙三十九年水天閣（「木」は誤寫）の刊本を鈔寫したもの。

(12) 使琉球錄二卷、一册、明・陳侃 撰、シ／282

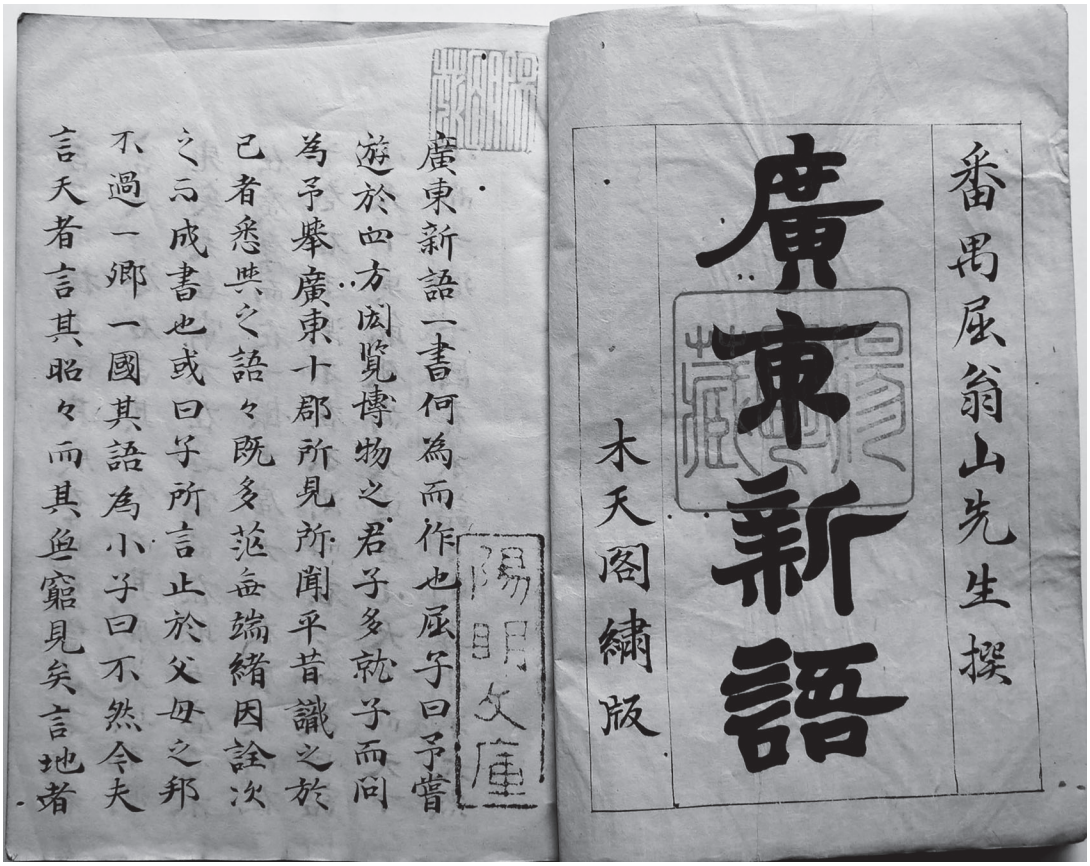
半葉十行、行二十字。香色表紙（二六・五×一七・七糎）に打附け書きの外題「琉球錄」、本文ともに家凞筆。「陽／明／藏」白文方印。明から琉球へ渡った册封使が見聞を記した書物はこの本だけではないが、陳侃の本書は嘉靖十三年高澄序があり、同類の書物の嚆矢となった。宮內廳書陵部に新井白石手筆本を收藏し、家凞と白石の交流を窺わせる一本である。

(13) 坤輿外記一卷 七奇圖說一卷、一册、極西・南懷仁 撰、コ／81

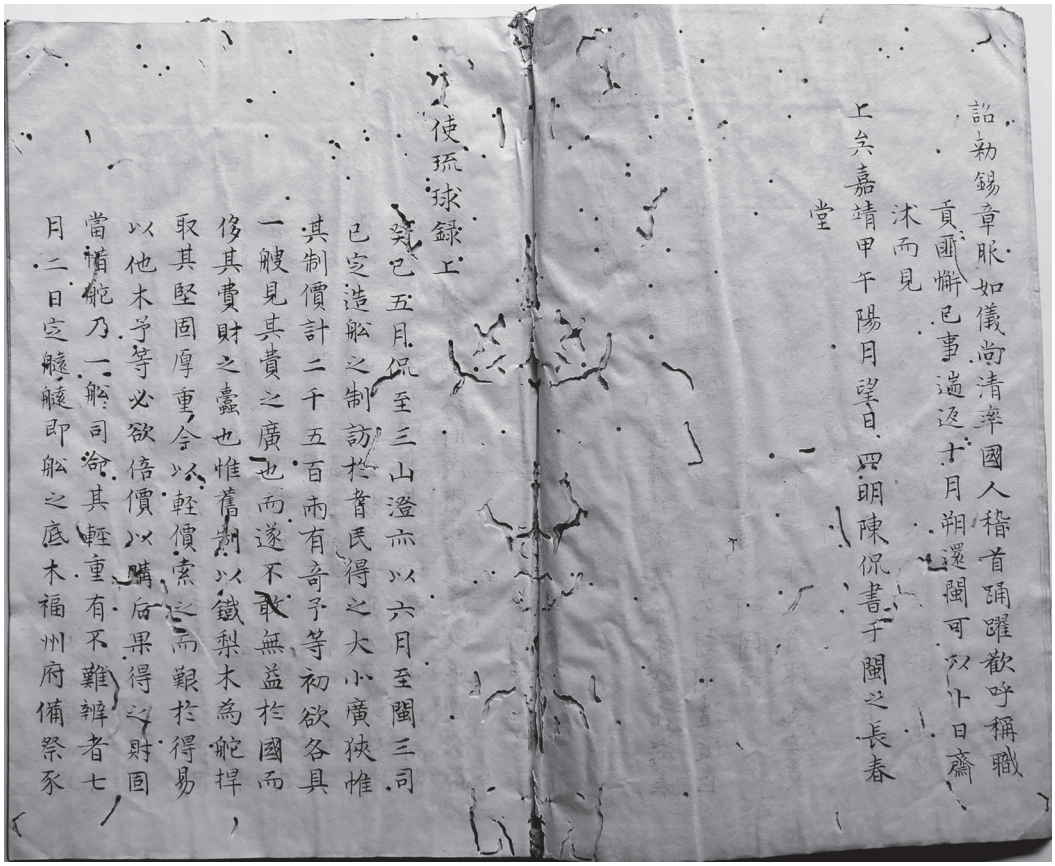
半葉十行、行二十字。柳鼠色地簀の子漉文様表紙（二三・七×一七・一糎）を大和綴じする。打附け書きの外題は家凞筆で、「坤輿外記」の下に小字で「附七奇圖說」と記し、さらに大字で「全」と書す。本文は他筆である。「陽／明／藏」白文方印、珍奇なものを記した博物學的な書物。「坤輿外記」は「無目蛇」以後を缺く。郭外上頭上頭に片假名で讀みを記している。

(14) 玉燭寶典十一卷 原缺卷第九 附解題一卷、四册、隋・杜臺卿 撰、キ／53

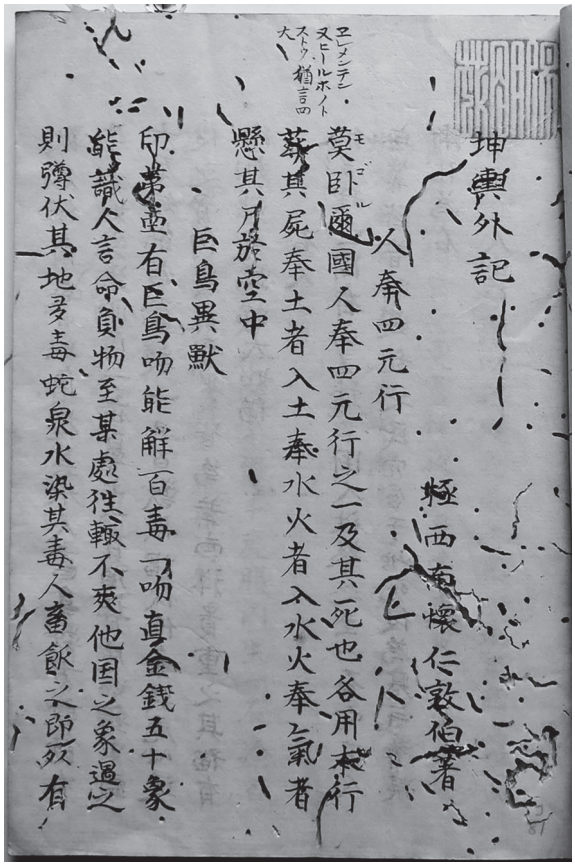
半葉十行、行十八字。料紙に鳥の子を用いる。表紙（三〇・三×二一・六糎）は灰色地に雲型水玉文、さらに上は藍色、下に藍色および紫色の打曇が施されている。家凞筆で打附け書きの外題「玉燭寶典」、四册各册に小字で春夏秋冬と記す。本文は他筆。「陽／明／藏」白文方印。朱引き、



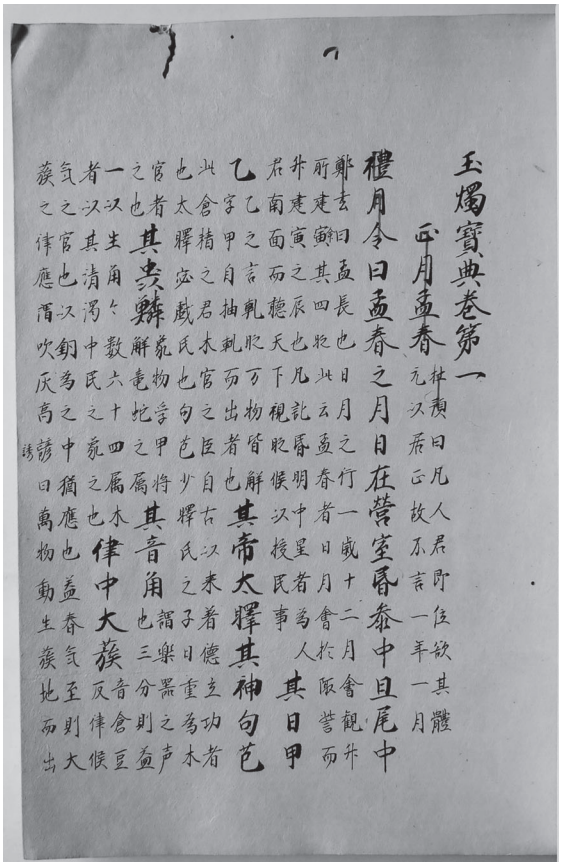
（11）廣東新語封面



（12）使琉球録



（13）坤輿外記



（14）玉燭寶典

ごく稀に朱の校字が見える。隋當時までの年中行事を記した書物であるが中國では失われ、前田家の尊經閣文庫に傳わる佚存書である。

（15）大唐六典三十卷附一卷、十三冊、唐・玄宗 御撰、唐・李林甫 等奉敕注、138／2、（芳村氏二三三頁）

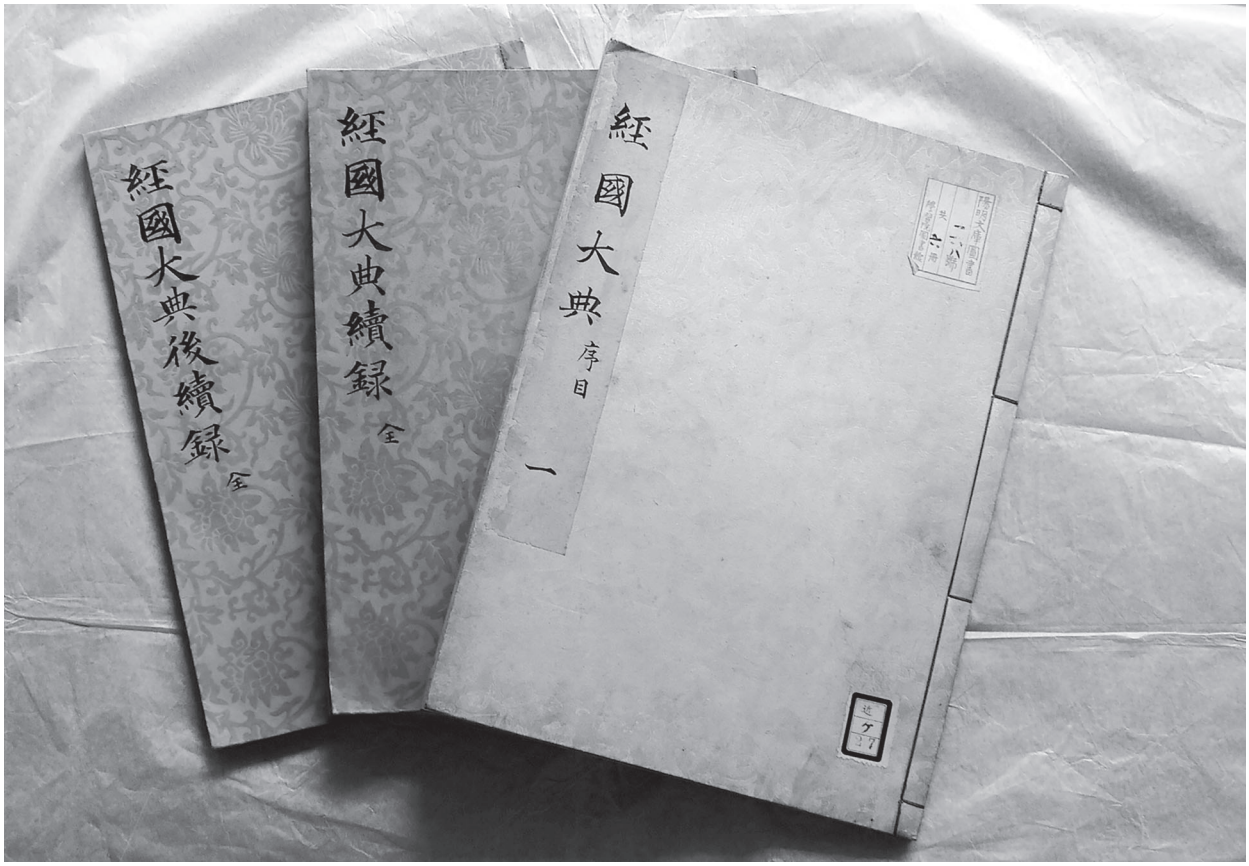
半葉九行、行十八字。空色地に金色で雲母刷りし向獅子丸散らし牡丹唐草文の唐紙の表紙（二九・二×二〇・七糎）。料紙は打紙を用いる。打附け書きの外題「大唐六典」、本文ともに家淵筆。唐の制度を記した書物である。明の嘉靖二十三年浙江按察司重刊本により鈔寫。返り點送り假名を附し、郭外上頭に一行六字の墨書がある。家淵の『大唐六典考訂』の第一次稿本である。なお、その後入手した正德刊本を底本とした『大唐六典考訂』の第二次稿本については、次の記載を參照。

（16）大唐六典三十卷、十冊、唐・玄宗 御撰、唐・李林甫 等奉敕注、138／3（芳村氏二三三～二三四頁）

毎葉八行、行二十字。料紙は打ち紙を用い、白地雲母刷り波濤文表紙（二九・九×二〇・七糎）に外題は無い。（15）の嘉靖本による第一次底本作成ののち『槐記』享保十一年十二月五日の條に明の正德十年重刊本を入手した次第が「去月中旬ノ頃田舍ヨリ五六部來シ書ノ中ニ、正德板ノ六典ヲ持來リテ御覽ニイル。（中略）今一部新書シテ」と記されている。本書は改めて鈔寫された、『大唐六典考訂』の底本である。本文は他筆ながら家淵の校訂が施されている。匡郭の内外に朱の校字があるほか、郭外上頭に雙行六～十字の藍・墨の書入れがあり、その他附箋や校訂の跡を殘す貴重書である。

（17）經國大典六卷、續錄六卷、後續錄六卷、四冊、一冊（續）、一冊（後）朝鮮・崔恆 等奉勅撰、朝鮮・李克增 等（續）、朝鮮・尹殷輔 等（後）、ケ／27

半葉十行、行十八字、正編および後續錄は半葉十行、行十七字、續錄



（17）經國大典

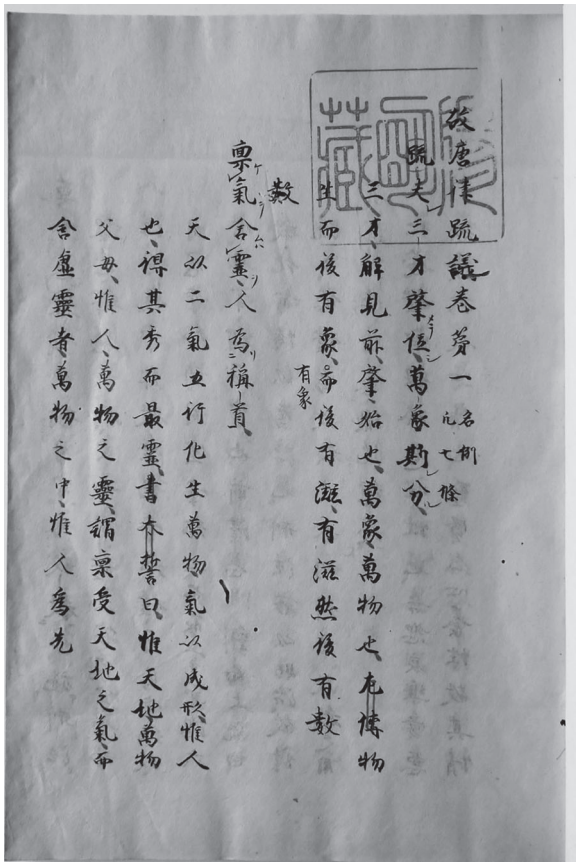
は八行、行十七字。正編は斐紙を用い、白練色地雲母空押し鳳凰花つなぎ文表紙（二九・三×二一・〇糎）を朱の絲で綴じている。打附け書きの書題および正編二冊卷三まで家凞が鈔寫しており、卷頭に「陽／明／藏」白文方印がある。鴇色地空押し丁字染草花文表紙（二七・一×一九・五糎）を綠の絲で綴じる。朝鮮王朝の法典で、六典からなる。正編・續録・後續録をすべて備えるものとしては内閣文庫所藏の宗家舊藏版本があり、藤本幸夫氏によれば取り合わせ本とのことである。[18]

（18）故唐律疏議三十卷、十冊、唐・長孫無忌 等奉敕撰、釋文纂禮 元・王元亮 撰、コ／136

半葉十行、行十八字。青い絲で大和綴じし刷毛目文様の香色表紙（二九・二×二〇・九糎）で包背裝にして藍色の題簽を配し、家凞筆で書題を記す。唐の刑法とその注釋書。朱の斷句、朱引き。さらに「釋文」冊以外は藍の校字および亂丁の訂正が家凞の筆でなされ、附箋も見られる。第三～五冊末に「一校」、第六冊末に「校了」、第七冊末に「一校了」とあり、鈔寫させたものを家凞が校訂したことが分かる。本書卷頭の「新刊故唐律疏議序」の末に「泰定四年（一三二七）秋七月既望文林郎江西等處儒學提舉柳贊謹序」とあり、元版を源とする。ただし『大唐六典』「凡例」に「據他書所引之文、如律令格式、今獨有寫傳故唐律疏議耳」と言及があり、この鈔本の底本もまた鈔本である。書陵部・蓬左文庫も鈔本を收藏する。後の文化年間に昌平阪學問所から刊行された。

（19）世恩録二卷、二冊、明・吳氏 輯、セ／7

半葉五行、行十二字。朱色地草花文表紙（二八・八×一九・七糎）を施す。書名は家凞筆の外題による。内題は、前冊「敕諭録」後冊「恩命録」。明の吳悌・吳仁度父子への萬曆四十一年までの敕諭を收録する。顯彰のための家刻本と思われる。吳悌（一五〇二～六八）は江西省金溪の人で、嘉靖年間の進士。二十年近く家居したのち、刑部侍郎に至って死去した。



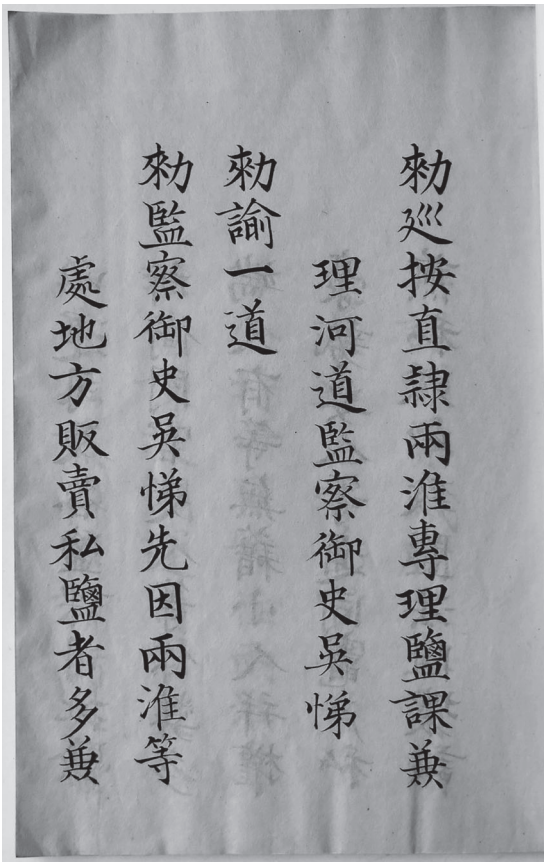
故唐律疏議卷第一 名例 凡七條

疏曰 三才肇位萬象斯分 三才解見前肇始也萬象萬物也 有形物生而後有象 有象而後有滋 有滋然後有數

稟氣含靈人爲最貴

天地二氣五行化生萬物 氣以成形 惟人也得其秀而最靈 書泰誓曰 惟天地萬物父母 惟人萬物之靈 謂稟受天地之氣而含靈者萬物之中 惟人爲先

（18）故唐律疏議



勅巡按直隷兩淮專理鹽課兼
理河道監察御史吳悌
勅諭一道
勅監察御史吳悌先因兩淮等
處地方販賣私鹽者多兼

（19）世恩録

吳仁度（一五四八～一六二五）はその子で、萬暦十七年の進士。工部侍郎に至った。なお、國家圖書館に明・吳巖輯明正德十六年（一五二一）自刻『世恩録』がある。

（20）聖諭一卷、一册、清・順治帝 康熙帝 撰、セ／20

半葉七行、行十七字、「上」字は擡頭、「皇上」は二字擡頭する。家淵筆。珊瑚珠色の表紙（二九・五×一七・〇糎）に外題は無い。清朝になって順治帝は「六諭臥碑文」を、康熙帝は「聖諭十六條」を公布したが、それらを納める。見返しに朱の雙鉤で「聖諭」とする。聖諭（順治九年）一葉六條、上諭（康熙九年）四葉十六條の薄い册子であるが、程順則『六諭衍義』とのつながりを感じさせる。

（21）紹興校定經史證類備急本草畫圖二十卷、十册、宋・王繼先 等奉勅撰、シ／206（芳村氏二三七頁、書影二四一頁）

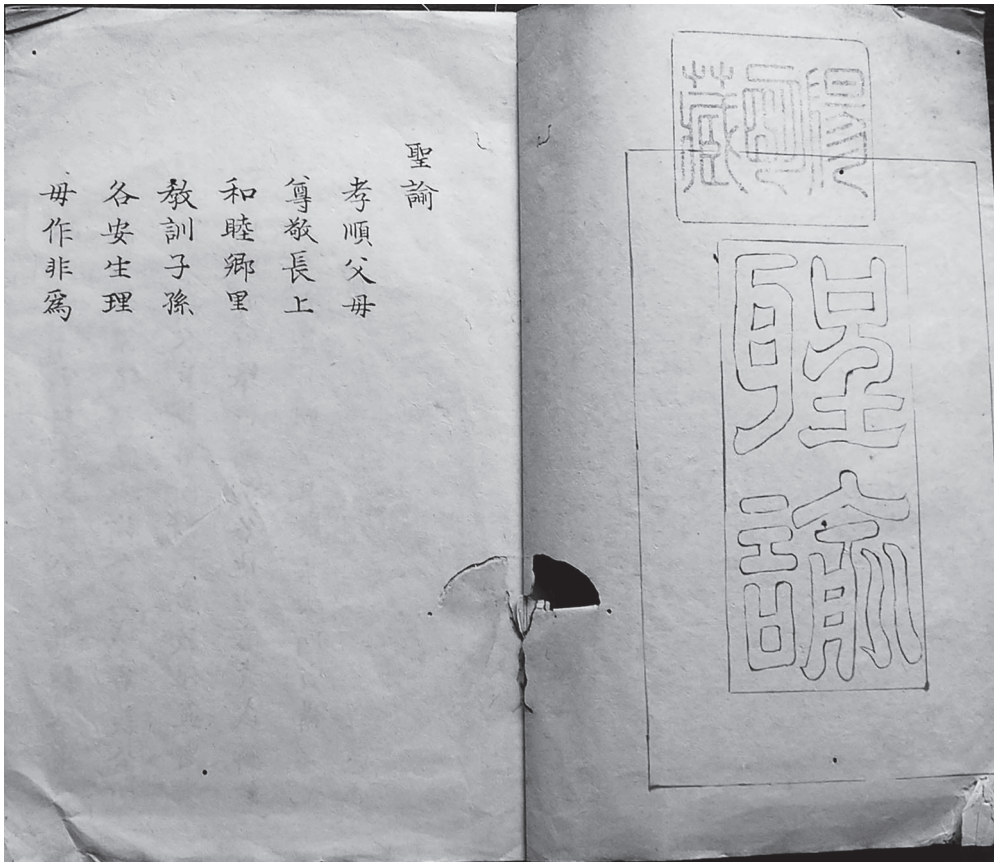
半葉十行、行二十字。紺地空押し木瓜兔桐丸紋散らし表紙（二六・八×一九・三糎）。「陽／明／藏」白文方印。卷八～十に彩色を施す。他筆である。芳村氏によれば、漢方藥の本で、二十卷本は他に見えない貴重書である。

（22）革節巵言五卷、二册、明・戴庭槐 撰、カ／20

半葉十行、行十九字。五瓣花を配した龜甲つなぎの桃色地に菊や四瓣花の草花文を空押しした表紙（二六・九×一七・一糎）に打附け書きの書題は家淵筆。暦法の書物で、萬暦二年の戴庭槐の序と萬暦四年の徐楚の序がある。卷二末に「己未孟夏道春考」とあり、内閣文庫所藏の林羅山（道春）手校本に同文が見える。底本はそれであろう。江戸との交渉を示す一本。寄合い書きである。

（23）天經或問一卷、二册、清・游藝 撰、テ／17

半葉九行、行二十四字。小豆色地しだ丸文表紙（二八・一×一九・三糎）に打附け書きの書題は家淵筆。本文は他筆。「陽／明／藏」白文方印。天



（20）聖諭

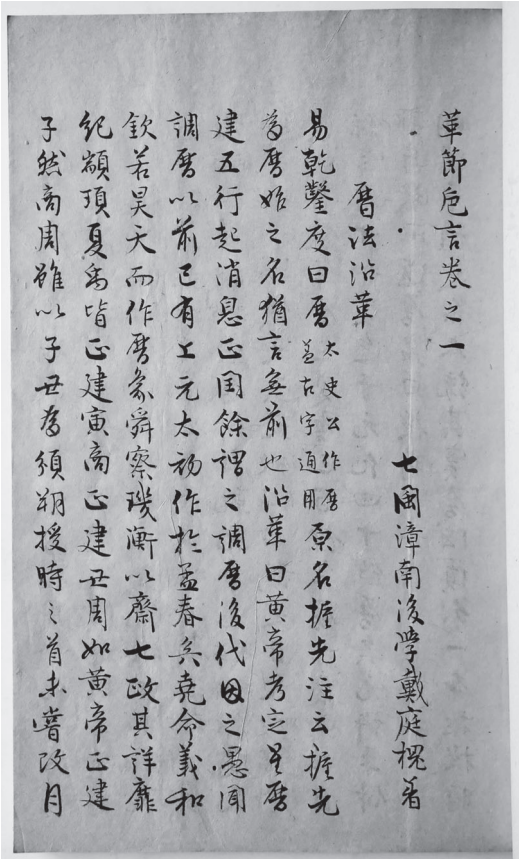
文學の書物。封面に「書林　大集堂梓」とあり、清の熊氏大集堂刻本によって鈔寫したことが分かる。朱の圏點を施し、注を斷句。墨印の十四圖は補配。享保十五年刊の和刻本がある。

（24）圖繪寶鑑續編一卷、一册、明・韓昂撰、ツ／7

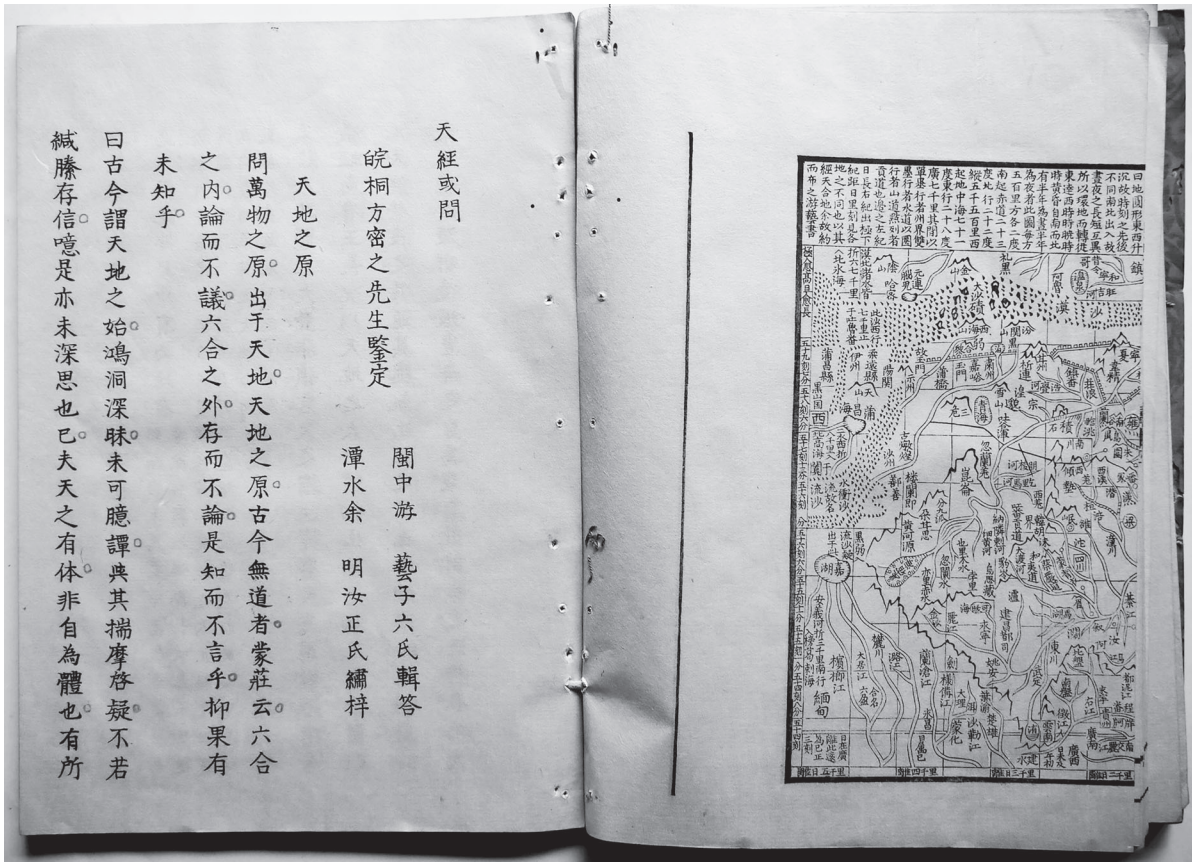
半葉九行、行十七字。淺葱地簀の子漉文表紙（二九・三×二一・一糎）に打附け書きの書題、本文とも家凞筆。本書は元・夏文彦撰『圖繪寶鑑』五卷の續編として編まれ、明人の傳が載錄されている。『槐記』享保十四年一月十六日の、表具には「第一ニ一軸ノ筆者ヲ吟味シテ、此人ハドレホドノ服ヲ著ルベキ人ゾト工夫シテ、其人ニ相應ノ切ヲ遣フコト」という言葉が實踐されていたことを示す資料といえよう。

（25）書史會要九卷 補遺一卷、三册、明・陶宗儀撰、シ／149

半葉十一行、行二十字。「陽／明／藏」白文方印。空色地升四瓣花文樣



（22）革節危言



天經或問

皖桐方密之先生鑒定　　閩中游　藝子六氏輯答

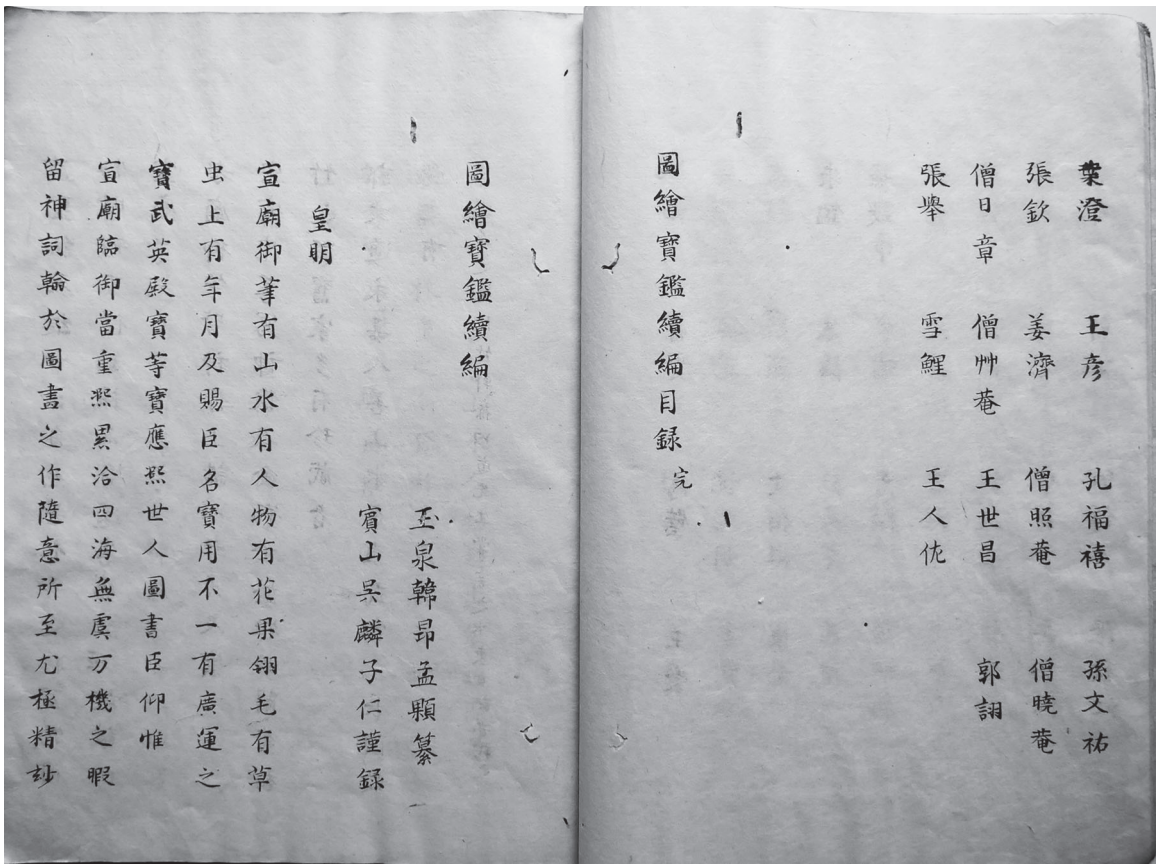
潭水余　明汝正氏繡梓

天地之原

問萬物之原出于天地天地之原古今無道者蒙莊云六合之內論而不議六合之外存而不論是知而不言乎抑果有未知乎

曰古今謂天地之始鴻洞深昧未可臆譚典其揣摩啓疑不若緘滕存信噫是亦未深思也已夫天之有体非自為體也有所

（23）天經或問



葉澄　王彥　孔福禧　孫文祐

張欽　姜濟　僧照菴　僧曉菴

僧日章　僧艸菴　王世昌　郭詡

張舉　雪鯉　王人佐

圖繪寶鑑續編目錄　完

圖繪寶鑑續編

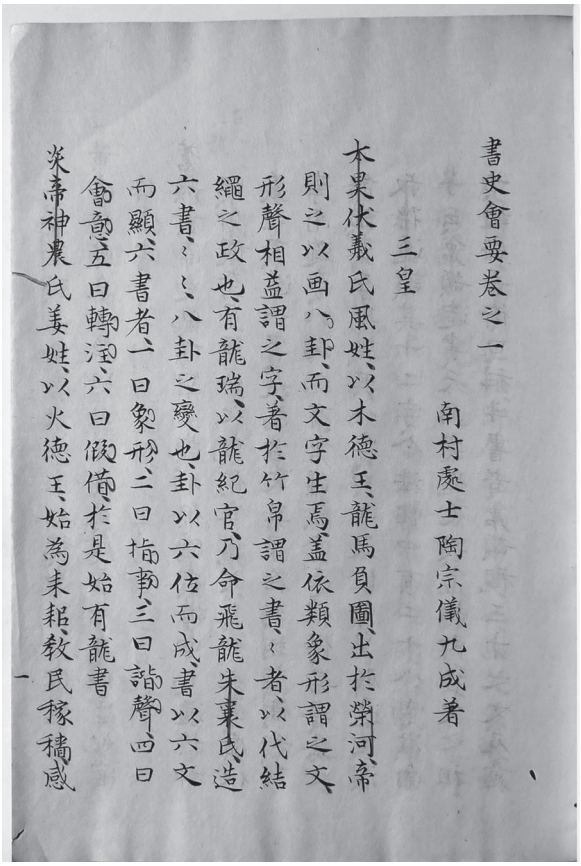
玉泉韓昂孟顒纂

賓山吳麟子仁謹錄

皇明

宣廟御筆有山水有人物有花果翎毛有草虫上有年月及賜臣名寶用不一有虞運之寶武英殿寶等寶應熙世人圖書臣仰惟宣廟臨御當重熙累洽四海無虞万機之暇留神詞翰於圖畫之作隨意所至尤極精妙

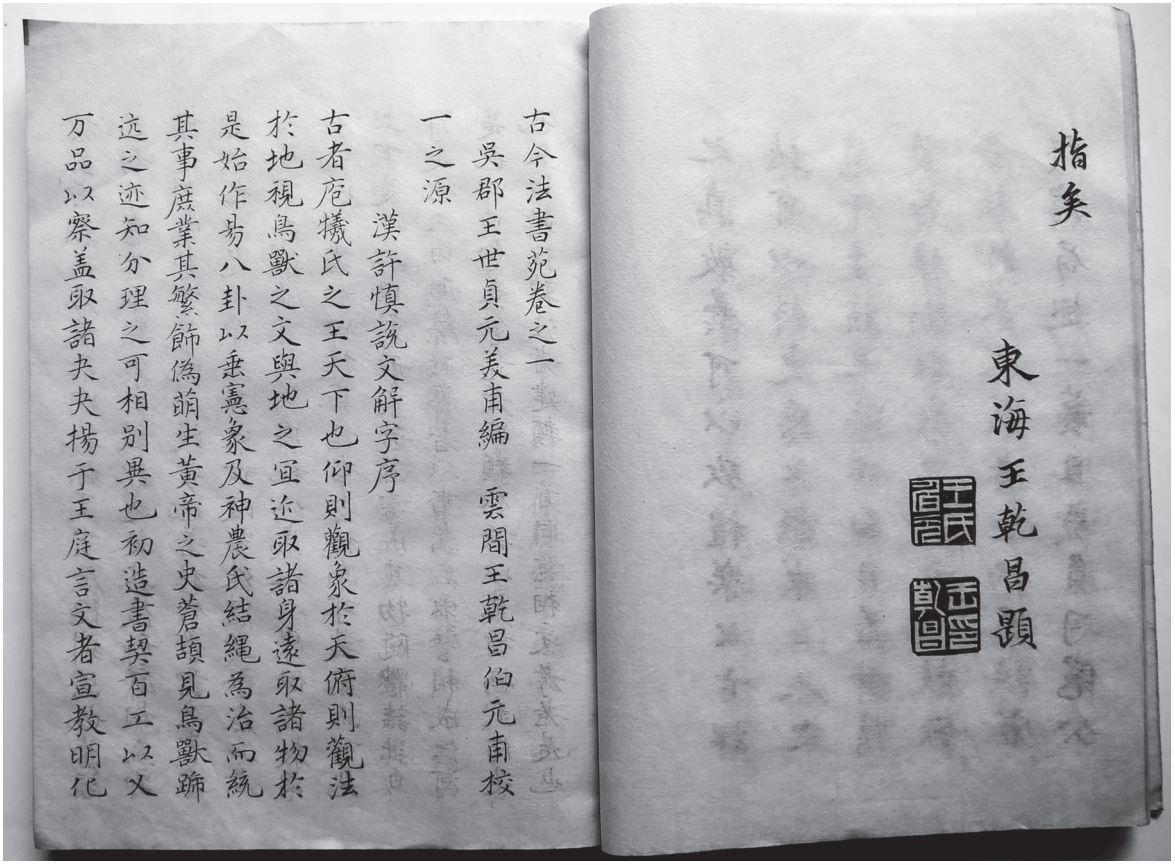
（24）圖繪寶鑑續編


書史會要卷之一
南村處士陶宗儀九成著
三皇
太昊伏羲氏風姓以木德王龍馬負圖出於榮河帝
則之以画八卦而文字生焉蓋依類象形謂之文
形聲相益謂之字著於竹帛謂之書書者以代結
繩之政也有龍瑞以龍紀官乃命飛龍朱襄氏造
六書六書八卦之變也卦以六位而成書以六文
而顯六書者一曰象形二曰指事三曰諧聲四曰
會意五曰轉注六曰假借於是始有龍書
炎帝神農氏姜姓以火德王始為耒耜教民稼穡感

（25）書史會要

表紙（二九・二×二〇・九糎）に、山吹地草花文空押し題簽を貼附し、打附け書きの外題は家凞筆。寄合い書き。序はすべて洪武九年と記しており、洪武本が底本であろう。序文には宋濂の本集『新刊宋學士全集』との考異を郭外上頭に墨書。本文にも「一作」の校合がある。末尾には朱で「右會要所引用諸書校本書、頗多脫略也、陶氏／纂輯日厭其繁刪之乎、後人轉寫偶脫之乎、／不可知焉、今據本書錄焉」の奥書があり、巻三には「右數傳法書苑引用會要載之、今會要脫之、／仍錄焉」の記載があり、脫誤を補うとともに異同を記した劄記『書史會要考異』を別に作成している。一方、明刊本『古今法書苑』（コ／123）にも「書史會要作某」の書込みがあり、相互に參照したことが分かる。

（26）古今法書苑七十六巻、二十册、明・王世貞編、明・王乾昌校、コ／101

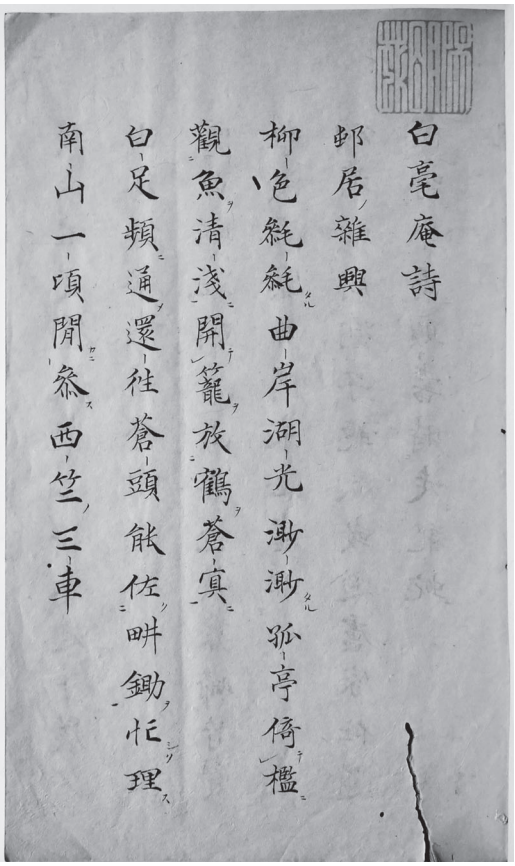

指矣
東海王乾昌題
古今法書苑卷之一
吳郡王世貞元美甫編　雲間王乾昌伯元甫校
一之源
漢許慎說文解字序
古者庖犧氏之王天下也仰則觀象於天俯則觀法
於地視鳥獸之文與地之宜近取諸身遠取諸物於
是始作易八卦以垂憲象及神農氏結繩為治而統
其事庶業其繁飾偽萌生黃帝之史蒼頡見鳥獸蹄
迹之迹知分理之可相別異也初造書契百工以乂
万品以察蓋取諸夬夬揚于王庭言文者宣教明化

（26）古今法書苑

半葉十行、行二十字。水色地萌黄色草花文表紙（二七・四×一九・七糎）を施し、打附け書きの外題「法書苑」は家凞筆。本文は他筆。「陽／明／藏」白文方印。第二册および第三册の首葉には舊藏者の「春／季／夢」の朱文方印も見える。卷六十九第四丁裏「唐嵩嶽少林寺碑」の上頭に「元祿己卯（十二年一六九九）四月九日見石刻正帶行字體摸柳公權」の朱書があり、それ以前の收藏である。陽明文庫に收藏する同書明刊本（コ／123）に比べると缺字が多い。鈔本を備えた後、狀態のより良好な明刊本を入手したものと思われる。

(27) 白毫庵詩　附膚偈、一册、明・張瑞圖、雪關智閬 撰、チ／16

半葉六行、行十四字。瓶覗地格子四瓣花文表紙（二六・一×一六・五糎）に打附け書きの外題「張瑞圖六言詩」、本文ともに家凞筆。「陽／明／藏」白文方印。張瑞圖詩百二十首、智閬の和詩百首を收錄。「崇禎甲戌嘉平月日白毫菴主圖書／郭如珪鐫」の記載があり、崇禎七年（一六三四）刊本が底本か。明・崇禎十二年刊『白毫菴内篇全四卷 外篇一卷 雜篇一卷 雜篇後集一卷』よりも、本書の底本が早く、珍本。東北大學狩野文庫に『白毫庵詩翰三卷』が所藏されるが、未見。



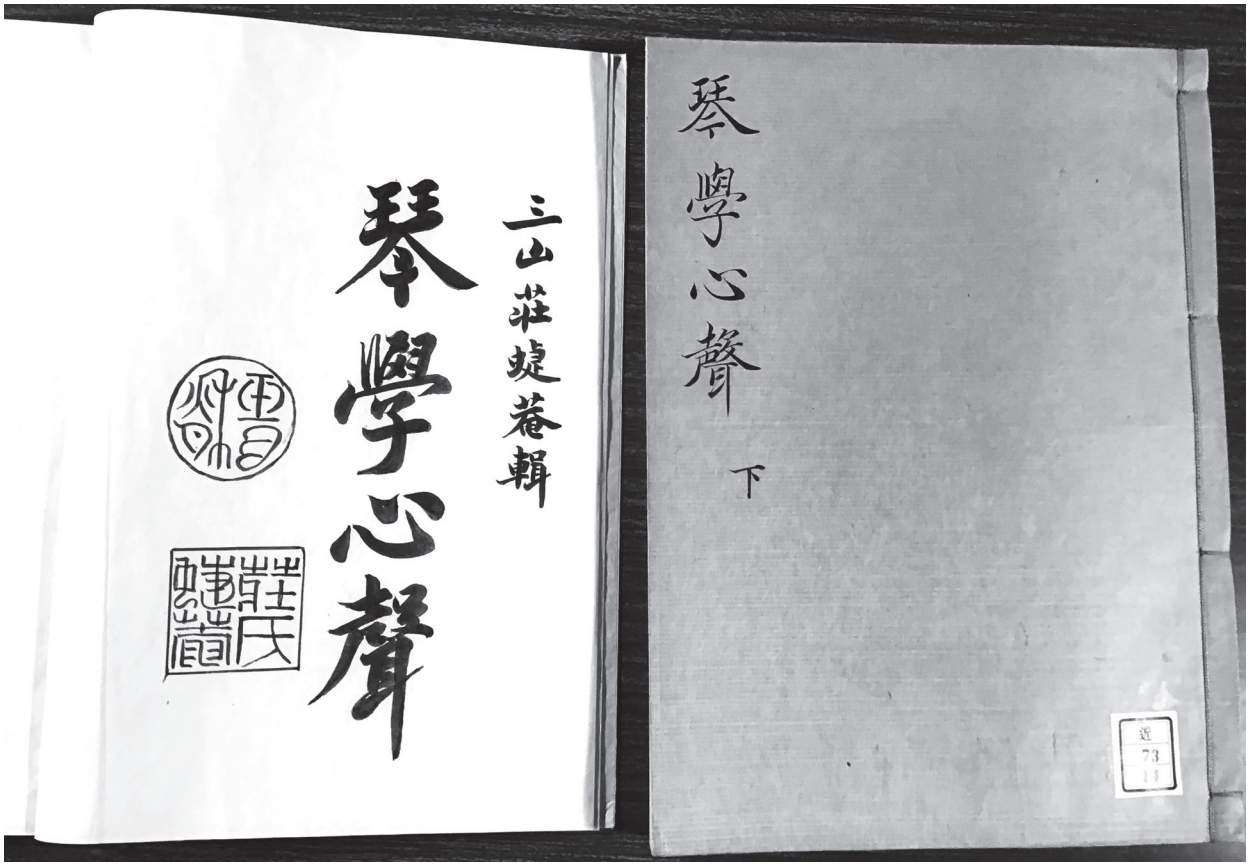
(27) 白毫庵詩

(28) 琴學心聲諧譜二卷附聽琴詩、二册、清・莊臻鳳 撰、73／14

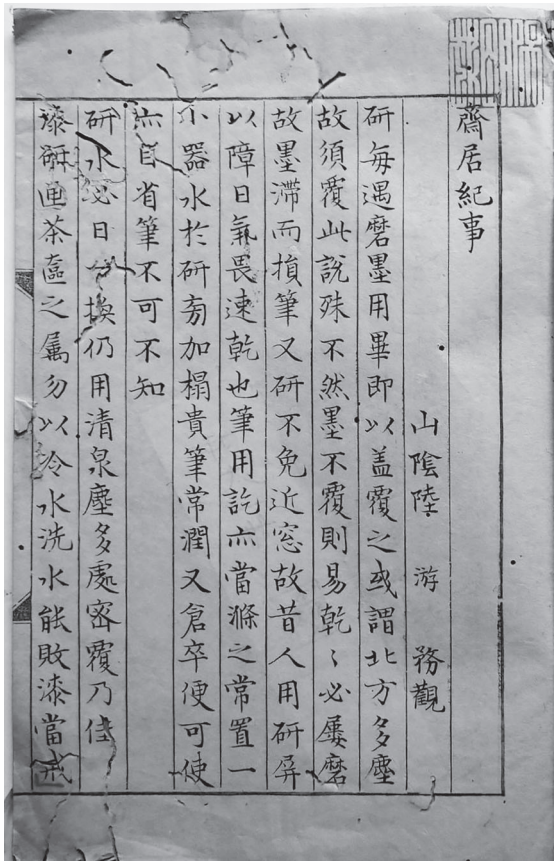
半葉八行、行二十字。黄土地簀の子漉文表紙（二六・八×一九・五糎）に打附け書きの外題「琴學心聲」は家凞筆。本文は他筆。封面「三山莊蝶庵輯／琴學心聲／（印影二顆）」。上册末の「右琴學心聲一册借河氏藏本／繕寫焉／震峰主人藏」も同筆である。河氏、震峰主人ともに未詳。國會圖書館藏『琴學心聲諧譜』は、封面に「三山莊蝶庵手輯　本衙藏板」「康熙丙午（五年）新鐫」とある。陽明文庫本の「聽琴詩目」には「序〔未刻〕／賦〔未刻〕」とあるが、國會圖書館本は「琴賦」を納める。また國會圖書館本にある「康熙乙巳（四年）梁知光序」および自跋の後の「栩栩曲」「梧葉舞秋風」「鈞天逸響序」「聽琴詩序」「梧葉舞秋風序」「秋鴻序」を陽明文庫本は納めないが、卷下の初めに國會圖書館本には無い「太平奏」「禹鑿龍門」「釋談章」（それぞれ序と譜）を收錄する。兩本ともに「聽琴詩目」の「跋」下に「幷俟／名公佳作隨　贈隨鐫以借不朽」とあるところからして、改訂を繰り返したものと推察され、二本のうちでは陽明文庫本が早いと思われる。北京の音樂研究所や上海圖書館等にも收藏されるようだが、未見のため先後は不明。珍本に類するであろう。

(29) 齋居紀事、一册、宋・陸游 撰、102／10

半葉十行、行十八字、四周單邊、内向黑魚尾の稿紙に鈔寫されている。紅色の角裂を施し香色表紙（二六・七×一八・〇糎）で包んでいる。打附け書きの外題、本文ともに家凞筆。「陽／明／藏」白文方印。卷末に「（略）放翁家會稽、遺墨多流／落人間、此帖宜爲僧石溪所寶、宇文公諒／謹題」および「右放翁齋居紀事帖稿眞迹、内多塗抹、餘／近得於洞庭陸氏、〃〃



（28）琴學心聲

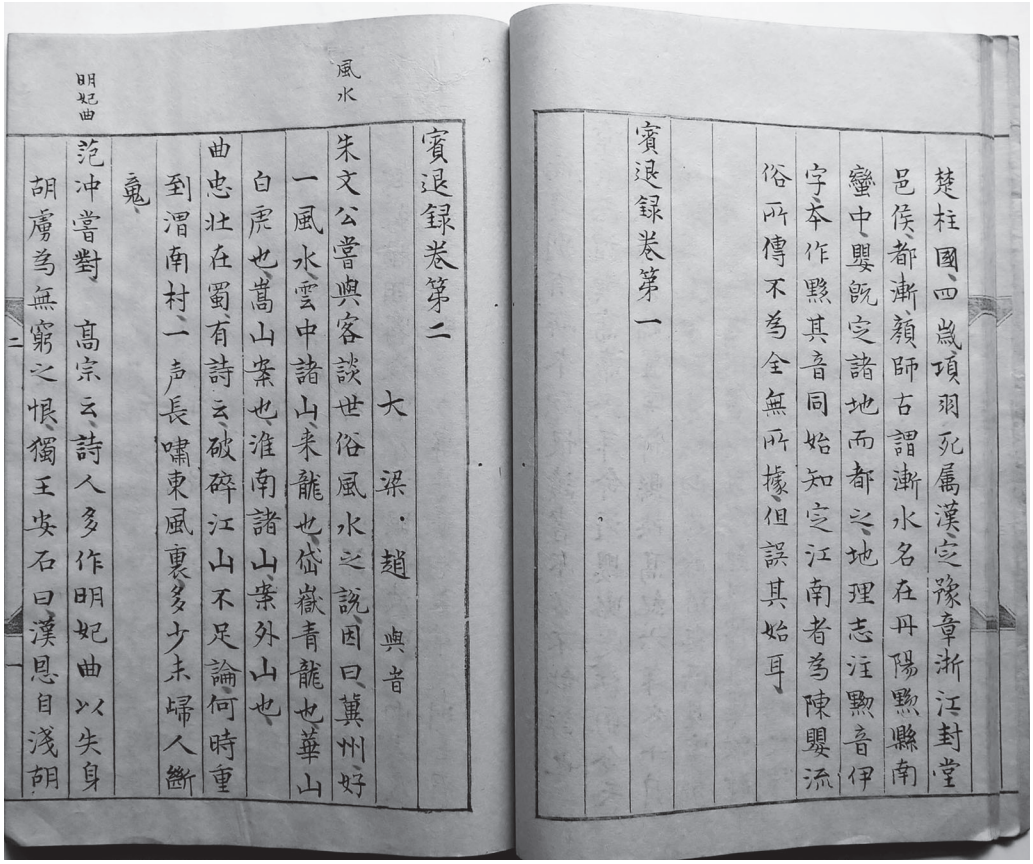


（29）齋居紀事

得於會稽鬻古書／者、欲便觀覽、因錄置几席、嘉靖丙戌臘月／四日、是日雪片如手、興之所至呵凍、作書／殊不覺寒也、中皋子袁褧尚之在臥雪齋／漫志」とあり、元・宇文公諒が見たという、僧石溪が所藏していた陸游の眞跡は、洞庭の陸氏にわたり、それを明の書畫家袁褧（號は中皋子）が嘉靖五年（一五二六）に鈔寫したものを元とする。

（30）賓退錄十卷、五册、宋・趙與時 撰、ヒ／19

半葉十行、行十八字、各條第二行より一字低格。（29）「齋居紀事」と同じ稿紙に家凞が鈔寫し、水色表紙（二六・六×一四・五糎）に外題を打附け書きしている。「陽／明／藏」白文方印。作者の見聞を記した書物。字數行數は宋臨安陳氏本『賓退錄』十卷に同じである。本書は著者を「大梁趙與旹」とし、「高宗」の上を一格空格にするなど宋本の面影を留める。尊經閣文庫は宋刊本を收藏する。陽明文庫本は序及び卷首を缺き、


楚柱國四嶌項羽死屬漢定豫章浙江封堂
邑侯都漸顏師古謂漸水名在丹陽歙縣南
蠻中嬰既定諸地而都之地理志注歙音伊
字本作縣其音同始知定江南者為陳嬰流
俗所傳不為全無所據但誤其始耳

賓退録卷第一

賓退録卷第二

大梁・趙與旹

風水

朱文公嘗與客談世俗風水之說因曰冀州好
一風水雲中諸山來龍也岱嶽青龍也華山
白虎也嵩山案也淮南諸山案外山也

明妃曲

曲忠壯在蜀有詩云破碎江山不足論何時重
到渭南村一声長嘯東風裏多少未歸人斷
魂
范冲嘗對高宗云詩人多作明妃曲以失身
胡虜為無窮之恨獨王安石曰漢恩自淺胡

（30）賓退録

卷六第五葉を缺葉、また缺字が見られる。朱で斷句し、郭外上頭に標目や校字があり、『槐記』には享保十四年閏九月四日「賓退録ヲ校合ス」とある。この頃入手したものであろう。

（31）天工開物三卷、三冊、明・宋應星 撰、テ／15

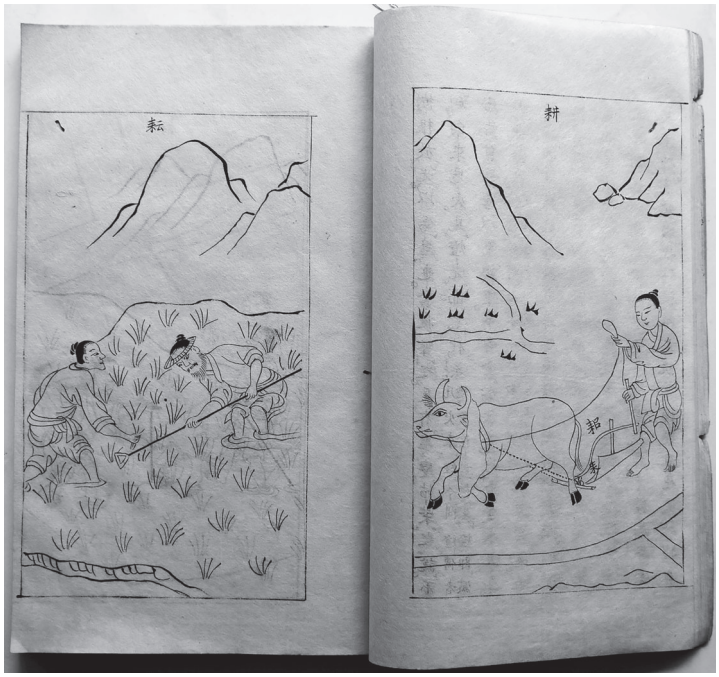
半葉九行、行二十一字。珊瑚朱色表紙（二六・三×一六・六糎）に打附け書きの外題は家淵筆。本文は他筆。「陽／明／藏」白文方印。繪圖を多數配した各種産業の技術書。崇禎十年（一六三七）自刻本を底本として句點評點や百を超える圖も精鈔する。郭外上頭に校字が、また全文に返り點送り假名が墨書されている。

（32）緝柳編三卷、一冊、元・沈膺元 編、明・黄正位 校訂、シ／84

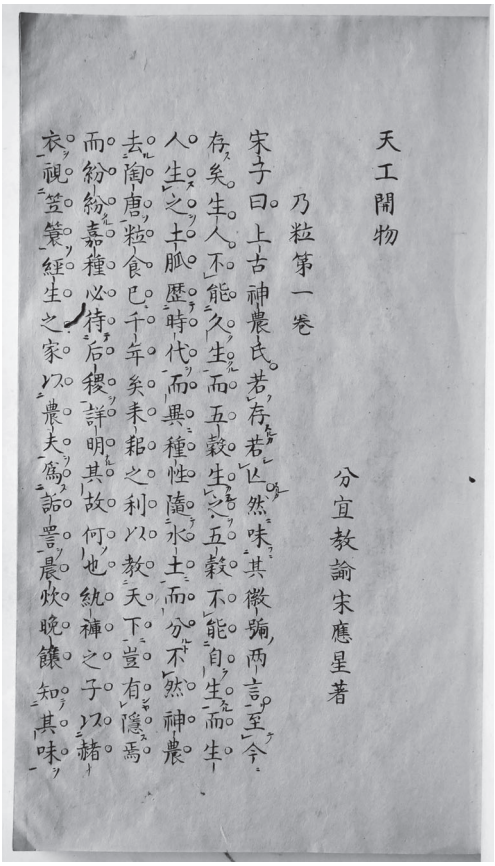
半葉九行、行二十字、四周單邊、内向花魚尾の稿紙に家淵により鈔寫され、薄紅地空押し山茶花文表紙（二六・七×一六・九糎）を施し、打附け書きの外題は家淵筆。小說筆記から拔萃し各條に出典の書名を記した雜纂の書物。内閣文庫に木村兼葭堂の舊藏鈔本を收藏する。

（33）畫一元龜 甲部殘九十四卷 乙部殘十九卷 丙部殘四十一卷 存一五四卷（缺七十八卷）、目一冊、甲部二十七冊 乙部六冊 丙部六冊 全四十冊、宋・闕名 撰カ／104（芳村氏二三九頁、書影二四二頁）

半葉十三行、行二十五字。書名は題簽に書かれた外題による。「陽／明／藏」白文方印。内題は甲部「類編祕府圖書畫一元龜」丙部「太學新編畫一元龜」。「右畫一元龜凡一百四十餘卷、在東福禪刹不二菴、嘗聽昔者天龍策彦和尚早遊學唐、遂比返錫斯縉紳之所嘉惠也、余幸其於今有傳於此、敢假一觀而得以繕寫焉、唯歷年既久其次屢殘缺、終不可知縱横總若干卷及何人撰也、實管中之一斑、豈不甚可惜乎、姑書卷末、享保壬寅（七年）秋九月旦、虚舟子誌」の奥書のあとに「物外／叟史／主印」「虚舟／之章」の家淵の印が押されている。策彦周良が招來し東福寺不二庵が所藏していた南宋・建安の余仁仲刊殘卷本『畫一元龜』を書寫したもの。



（31）天工開物圖

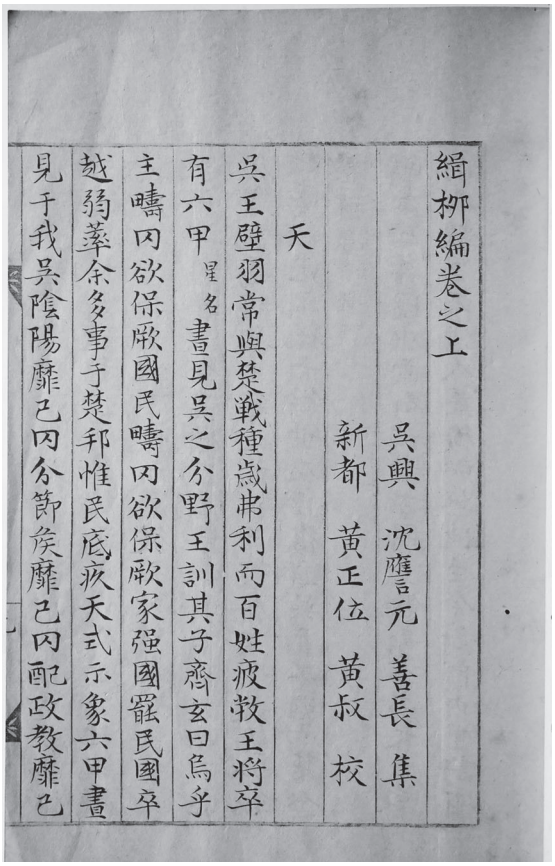

天工開物
乃粒第一卷
分宜教諭宋應星著
宋子曰上古神農氏若存若亡然味其微蹟兩言至今存矣生人不能久生而五穀生之五穀不能自生而生人生之土脈歷時代而異種性隨水土而分不然神農去陶唐粒食已千年矣未耜之利以教天下豈有隱焉而紛紛嘉種必待后稷詳明其故何也統禘之子以赭衣視笠簑經生之家以農夫爲詬詈晨炊晚饟知其味

（31）天工開物

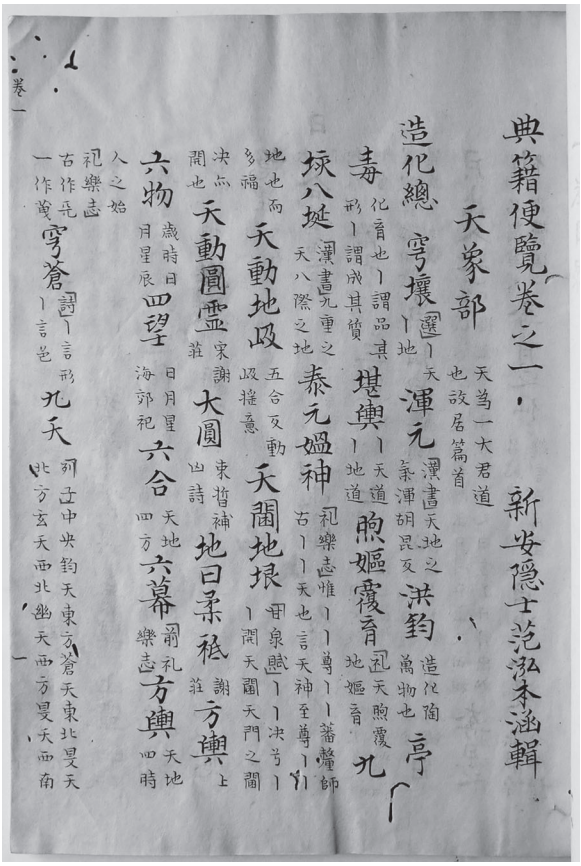
首册は家凞を含む寄合い書き、第二册以下は他筆である。料紙には打ち紙を用い、紅緋地雲母刷り唐草文表紙。ただし第一册は文様が異なり、藤丸散らし草花文を空押しした同色の表紙（二八・七×二〇・二糎）を施す。桐箱に收められている。

（34）典籍便覽八卷、八册、明・范泓 編／明・范淶 注、テ／18

半葉十行、行二十～二十三字、各標目の次行からは二字低格。淺葱地雲母刷り花文表紙（二九・二×二〇・九糎）に雌黄色の題簽を貼附し、家凞筆で外題を記す。本文は寄合い書き。「陽／明／藏」白文方印。「萬曆紀元歲在癸卯一陽生通奉大夫新／安范淶原易書於武林薇垣右署之素／絲齋」とあり、底本は萬曆三十一年（一六〇三）刻本。『槐記』享保十四年十二月二十一日條には『典籍便覽』は「堀正脩[19]ガ本ナリ」の注がある。本書は他本の校訂にも用いられており、家凞はこの本を高く評價してい


緝柳編卷之上
吳興 沈鷹元 善長 集
新都 黃正位 黃叔 校
天
吳王壁羽常與楚戰種歲弗利而百姓疲敝王將卒
有六甲星名書見吳之分野王訓其子齊玄曰烏乎
主疇囚欲保厥國民疇囚欲保厥家强國罷民國卒
越弱率余多事于楚邦惟民底疚天式示象六甲書
見于我吳陰陽靡已囚分節侯靡已囚配政教靡已

（32）緝柳編

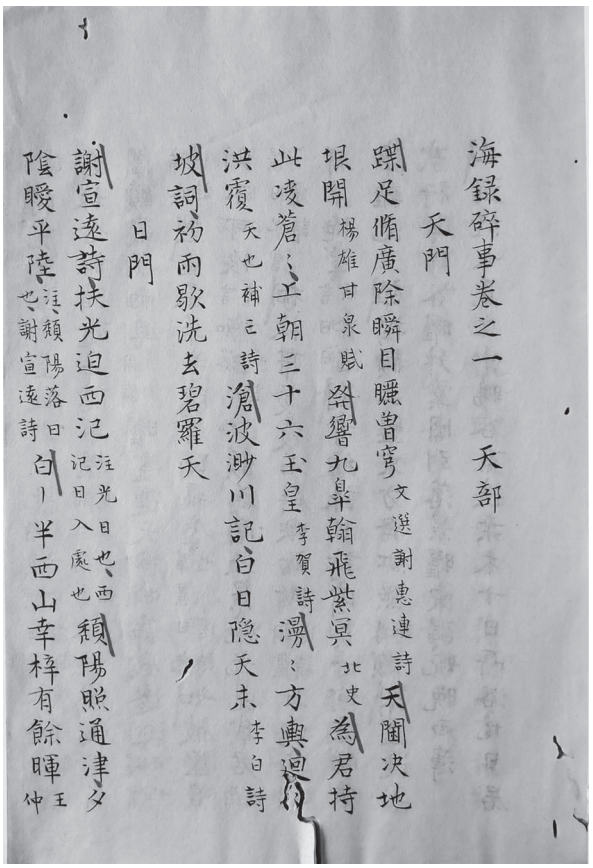

典籍便覽卷之一　新安隱士范泓本涵輯
天象部　天為一大君道也故居篇首
造化總　穹壤　壓ノ天　渾元　漢書天地之氣渾胡昆反　洪鈞　造化陶萬物也　亭毒　化育也ノ謂品其形ノ謂成其質　堪輿　天道ノ地道　煦嫗覆育　孔天煦覆ノ地嫗育　坱圠　漢書元垂之天ノ際之地　泰元媼神　祀樂志惟ノ一尊ノ一蕃釐師古ノ一天也言天神至尊ノ也　天動地吸　五合反動ノ吸接意　天闔地垠　甲泉賦ノ決弓ノ闔天闔天門之闔ノ垠岸也而多福決而也　天動圓靈　宋謝莊　大圓　東晉補山詩　地曰柔祇　謝莊　方輿　上閩也　六物　歲時日月星辰　四望　日月星海郊祀　六合　天地四方　六幕　爾礼樂志　方輿　天地四時人之始祀樂志古作兄一作貺　穹蒼　詩ノ言形ノ言色　九天　列子中央鈞天東方蒼天東北旻天北方玄天西北幽天西方昊天西南

（34）典籍便覽

たようだ。

（35）海録碎事存十五巻缺七巻、四冊、宋・葉廷珪 撰、カ／102

半葉十行、行二十字。巻八上、九上、十四至十七、二十を缺く。本篇首葉に「陽／明／藏」白文方印。鴇羽地梔色唐草草花文表紙（二九・二×二一・〇糎）に打附け書きの外題、本文ともに家淵筆。南宋前期に編纂された類書で、今では散逸した書物からの引用が見られる。朱引き、朱の斷句・圈點・合點が施されて、精讀されたことが分かる。紹興十九年の原序の後に「嘉泰甲子之歲良月吉日建安葉氏鼎新鏤板于／家塾」の刊記があり、宋の嘉泰四年（一二〇四）葉氏家塾本が底本であろう。現在目にすることのできる明・萬曆二十六年劉鳳刻本とは別系統であり、宋本の姿を窺うことのできる本書は貴重である。


海録碎事巻之一　天部
天門
蹴足脩廣除瞬目曜眥穹　文選謝惠連詩　天闔決地垠開　楊雄甘泉賦　發響九皐翰飛紫冥　北史　為君持此凌蒼〻上朝三十六玉皇　李賀詩　湯〻方輿迴洪霞　天也補之詩　滄波渺川記白日隱天未　李白詩
坡詞初雨歇洗去碧羅天
日門
謝宣遠詩扶光迫西汜　注光日也西汜日入處也　頹陽照通津夕陰暖平陸　注頹陽落日也謝宣遠詩　白ノ半西山幸梓有餘暉　王仲

（35）海録碎事

（36）百廿詠、二冊、唐・李嶠 撰、リ／6

半葉八行、一行は上下段に分け各五字一句を配し、楷書で記されている。打紙を用い、縹色表紙（二九・六×二〇・九糎）に白い本題簽が見えるがさらに紅色の題簽を重ね、打附け書きの外題「唐李嶠雜詠」は家淵筆。本文は他筆。墨引き、墨の返り點および圈發（聲點）、朱のヲコト點、薄墨で本文校訂および傍訓が施されている。末一丁に家淵の「李嶠爲兒時、夢人遺雙筆、自是有文辭、十五通五經、二十擢進士第、〔本傳　畫一元龜丙部卷之七十學問門幼學〕」の書入れがある。

（37）李嶠雜詠〔百二十首〕、一冊、唐・李嶠 撰、リ／7

半葉八行、行十六字。楷書行書で記されている。若葉地に薄葉色の唐草花文の蠟箋表紙（二八・八×二一・〇糎）に打附け書きの「李嶠雜詠〔百二十首〕」の外題は家淵筆。本文は他筆。「陽／明／藏」白文方印。「建

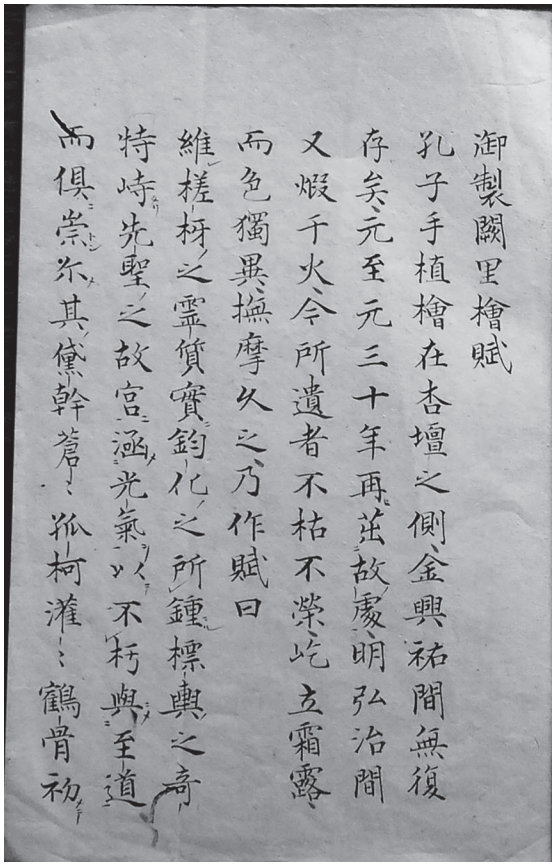
久八年」「建治」「延文三年」の本奥がある。本文と同筆の墨筆の校字が施され、家淵筆の朱の校訂が第五葉「江」詩まで施されているのは、次の（38）「李嶠雑詠」も同じ。

（38）李嶠雑詠存一巻、一冊、唐・李嶠撰、リ／8

半葉七行、行十五字、小字雙行注、本文とともに香色表紙（二六・七×一七・九糎）に打附け書きの外題「李嶠雑詠」も家淵筆。巻上（日～兔）のみが殘る。前掲の他筆の二點の李嶠詩を參照されたい。なお陽明文庫には古鈔本も收藏する。[20]

（39）御製闕里檜賦　附御製竹賦一巻、一冊、清・康熙帝カ／94

半葉八行、行十六字。打附け書きの外題「康淵帝御製〔檜賦／竹賦〕」、本文ともに家淵筆。全四葉の冊子ながら、緋色表紙（二六・六×一七・四糎）が包背裝で施されている。「檜賦」は曲阜の楷を詠じるものである。

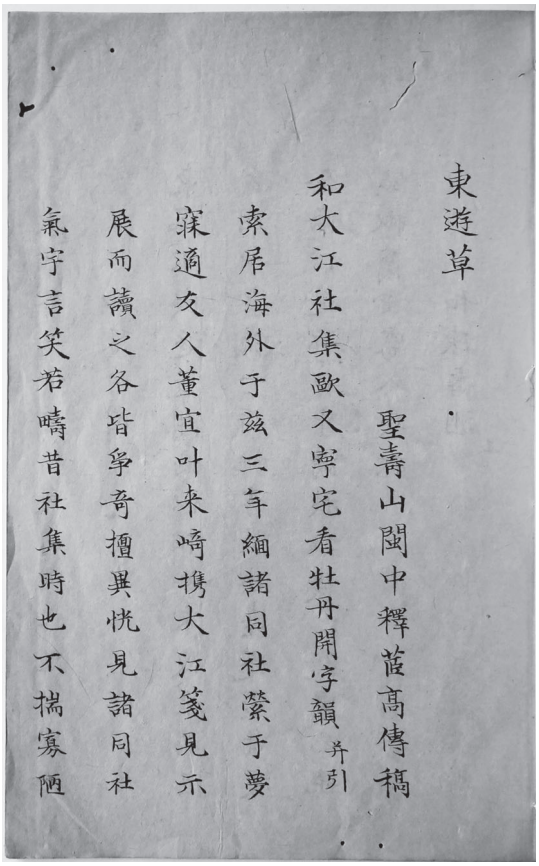

御製闕里檜賦
孔子手植檜在杏壇之側金興祐間無復
存矣元至元三十年再茁故處明弘治間
又煅于火今所遺者不枯不榮屹立霜露
而色獨異撫摩久之乃作賦曰
維槎枒之靈質實鈞化之所鍾標輿之奇
特峙先聖之故宮涵光氣以不朽與至道
而俱崇尒其儀幹蒼蒼孤柯濯濯鶴骨初

（39）康熙帝御製檜賦

程順則から贈られた「楷盃」と關係するか。墨筆で返り點送り假名を附す。他の收藏を檢索し得ない。

（40）東遊草　附道本詩、一冊、清・方瑾等撰、ト／1

半葉七行、行十六字。香色表紙（二六・〇×一七・三糎）に墨の「東遊草」の下に朱の「道本詩」を打附け書きする。首葉書題の次行に「聖壽山閩中釋莅高傳稿」とあり、引には閩の釋莅亭とある。釋莅亭には「蕭鳴集一巻」、また『國書總目錄』に『蕭鳴草隨意草拾遺東遊草』（未見）がある。長崎を訪れた董宜叶が攜えてきた詩巻に、閩から來日し、長崎聖壽山崇幅寺の六代目住職となった禪僧の黄檗道本（法諱は寂傳）が唱和した詩集。方瑾の跋に「附梓以公知詩者」とあり、底本は刻本だったようである。「東遊草」六葉は家淵の筆になり、「道本詩」二葉は別筆である。


東遊草
聖壽山閩中釋莅高傳稿
和大江社集歐又寧宅看牡丹開字韻并引
索居海外于茲三年緬諸同社縈于夢
寐適友人董宜叶來崎携大江箋見示
展而讀之各皆爭奇擅異恍見諸同社
氣宇言笑若疇昔社集時也不揣寡陋

（40）東遊草

(41) 清朝詩、一冊、清・康熙帝 釋紀蔭 他撰、シ／185

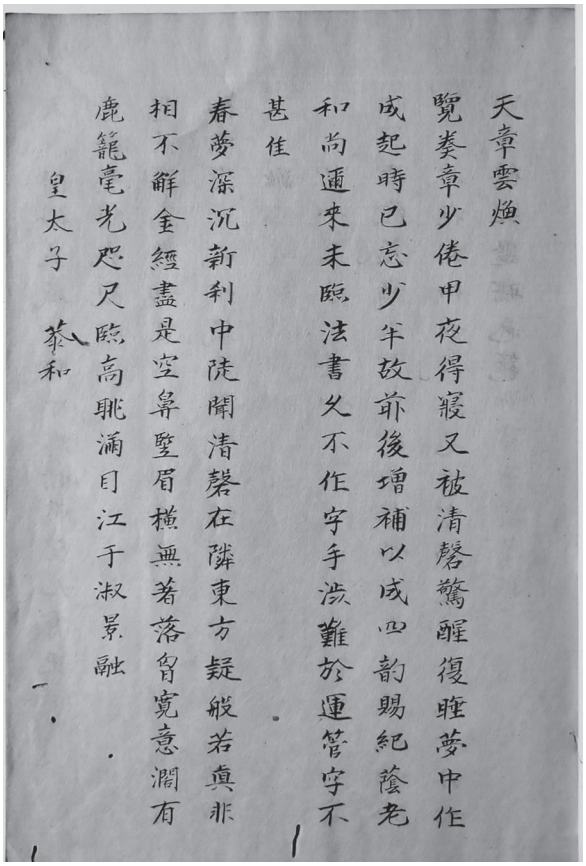
半葉九行、行二十字、本文とともに、錆淺葱地簀の子漉文様表紙（二七・九×一九・七糎）の外題「清朝詩」は家凞による。巻頭は「天章雲煥」。「康熙乙酉新秋高旻紀蔭恭識」とあり、康熙四十四年（一七〇五）揚州天寧寺での康熙帝と皇子、臣下、僧侶らの唱和詩を十五葉に鈔寫する。後に「宙亭別錄〔燕遊草 康熙三十八年〕」「御製詩一首 〔賜紀蔭〕」八葉を附錄する。宙亭は釋紀蔭の室號。ちなみに康熙帝がしばしば巡幸したことは有名で、康熙三十八年（一六九九）には第三次の、康熙四十四年には第五次の南巡を行っている。本書の底本はそれぞれの機會にまとめられたものであろう。

(42) 百花鳥圖詩、一冊、清・張廷玉 鄂爾泰 撰、ヒ／12

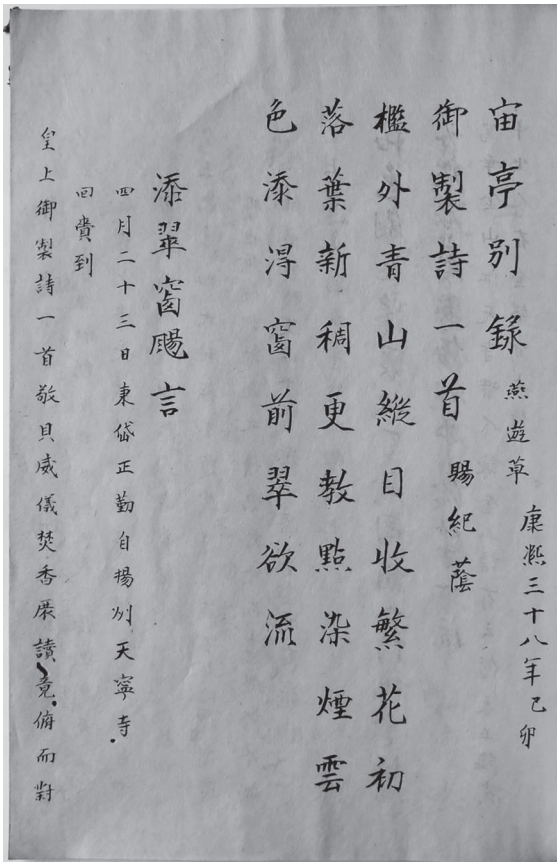
半葉十行、行二十字。白綿紙を用い、赤茶地空押し笹草花文表紙（二六・七×一七・三糎）を施す。打附け書きの外題「百鳥詩卷」、本文ともに家凞筆。「陽／明／藏」白文方印。末尾に堀井洌の跋文「此書原本誤訛頗多、且書且改、其有不可知者／姑因舊貫云／丁卯孟春十七日 井洌」を載せる。同じ跋文が國會圖書館藏鈔本の『百花鳥圖詩』（特1-523）にも見える。

(43) 文章緣起註一卷續一卷、一冊、梁・任昉 撰、明・陳懋仁 註、（續）明・陳懋仁 撰、フ／27

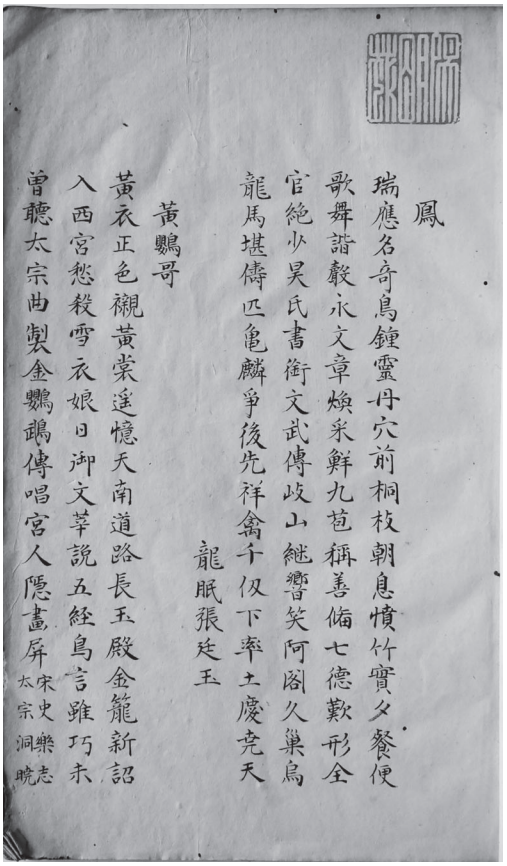
半葉十行、行十八字、四周單邊、有界の稿紙を用いる。辰砂色地南天・小柄伏蝶の蠟箋表紙（二六・六×一八・〇糎）に「文章緣起註」の外題は、本文ともに家凞筆。「陽／明／藏」白文方印。「文章緣起註續序」に「崇禎壬午（十五年、一六四二）陬月福唐林古度讀」とあり、底本は崇禎刊本であろう。明末清初の人、林古度（一五八〇～一六六六）は、字は茂之、那子、福建福清の人であるが、崇禎のころ金陵に移り、曹學佺『全蜀藝文志』等を刻している。


天章雲煥
覽奏章少倦甲夜得寢又被清磬驚醒復睡夢中作
成起時已忘少年故前後增補以成四韻賜紀蔭老
和尚通來未熙法書久不作字手澁難於運管字不
甚佳
春夢深沉新刹中院闌清磬在隣東方疑般若真非
相不解金經盡是空鼻墅眉横無著落胷寬意濶有
鹿籠毫光咫尺熙高眺滿目江干淑景融
皇太子 茶和

(41) 清朝詩


宙亭別錄 燕遊草 康熙三十八年己卯
御製詩一首 賜紀蔭
檻外青山縱目收繁花初
落葉新稠更教點染煙雲
色添得窗前翠欲流
添翠窗題言
四月二十三日 東宮正勤自揚州天寧寺
回貴到
皇上御製詩一首敬貝威儀焚香展讀竟俯而對

(41) 宙亭別錄



鳳

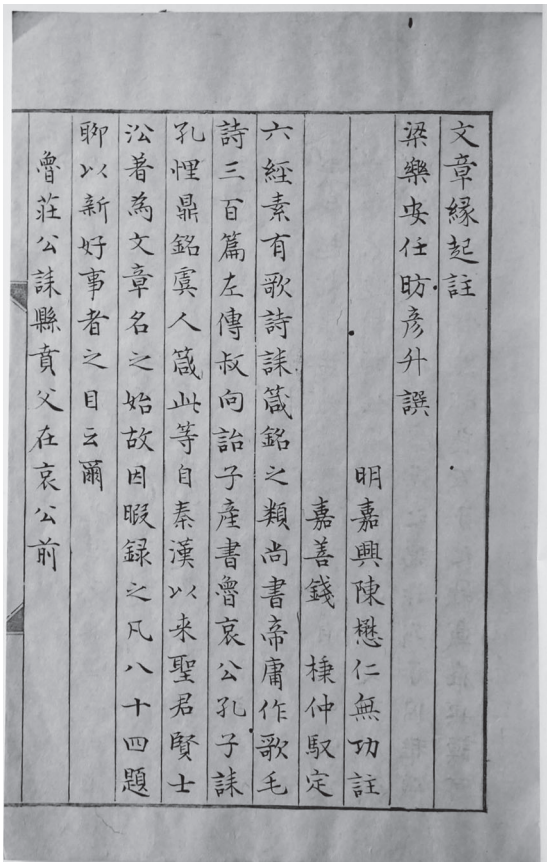
瑞應名奇鳥鍾靈丹穴前桐枝朝息憤竹實夕餐便
歌舞諧穀永文章煥采鮮九苞稱善備七德歎形全
官絶少昊氏書銜文武傳岐山絶響笑阿閣久巢烏
龍馬堪儔匹龜麟爭後先祥禽千仞下率土慶堯天

龍眠張廷玉

黃鸝哥

黃衣正色襯黃裳逐憶天南道路長玉殿金籠新詔
入西宮愁殺雪衣娘日御文苹說五經鳥言雖巧未
曾聽太宗曲製金鸝鵡傳唱宮人隱畫屏宋史樂志太宗洞曉

（42）百花鳥圖詩



文章緣起註

梁樂安任昉彥升譔

明嘉興陳懋仁無功註
嘉善錢　棟仲馭定

六經素有歌詩誄箴銘之類尚書帝庸作歌毛
詩三百篇左傳叔向詒子產書魯哀公孔子誄
孔悝鼎銘虞人箴此等自秦漢以來聖君賢士
沿者為文章名之始故因暇錄之凡八十四題
聊以新好事者之目云爾

魯莊公誄縣賁父在哀公前

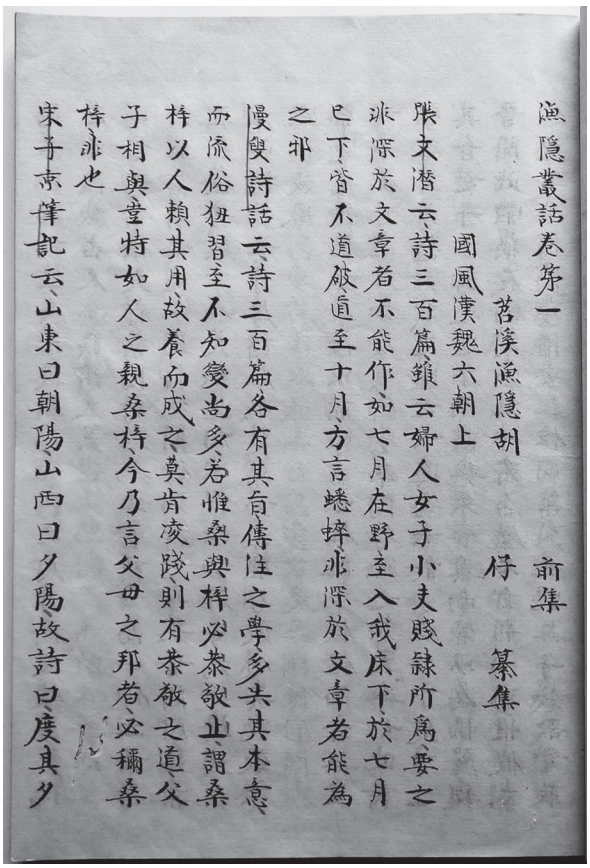
（43）文章緣起註

（44）苕溪漁隱叢話六十卷 後集四十卷、十一冊、宋・胡仔 撰、キ／22

半葉十三行、行二十二字、打紙を用い、暗黄緑地雲母刷り唐草文表紙（二七・〇×一九・四糎）に打附け書きの外題「漁隱叢話」は家凞筆。本文は寄合い書き。「陽／明／藏」白文方印。序のあとに「偸南臨川書／堂鼎新繡梓」とあり、内閣文庫に同版の江戸初鈔林（大學頭）家本を所藏する。本書の底本は散佚[21]。郭外上頭に稀に朱墨の校字および墨の書入れがある。第一冊および第六冊には朱の斷句および朱引きが、第二・三・五冊は斷句のみが施され、第四冊には無い。後集は卷二の途中まで朱引きが施されている。『槐記』には享保十年十月朔日條に「瀛奎律髓、漁隱叢話、天中記、詩藪」の書名が記されている。

（45）韻語陽秋二十卷、四冊、宋・葛立方撰、イ／25

半葉十行、行二十字、各條第二行以下は低一格。香色表紙（二三・五×



漁隱叢話卷第一　前集

苕溪漁隱胡仔纂集

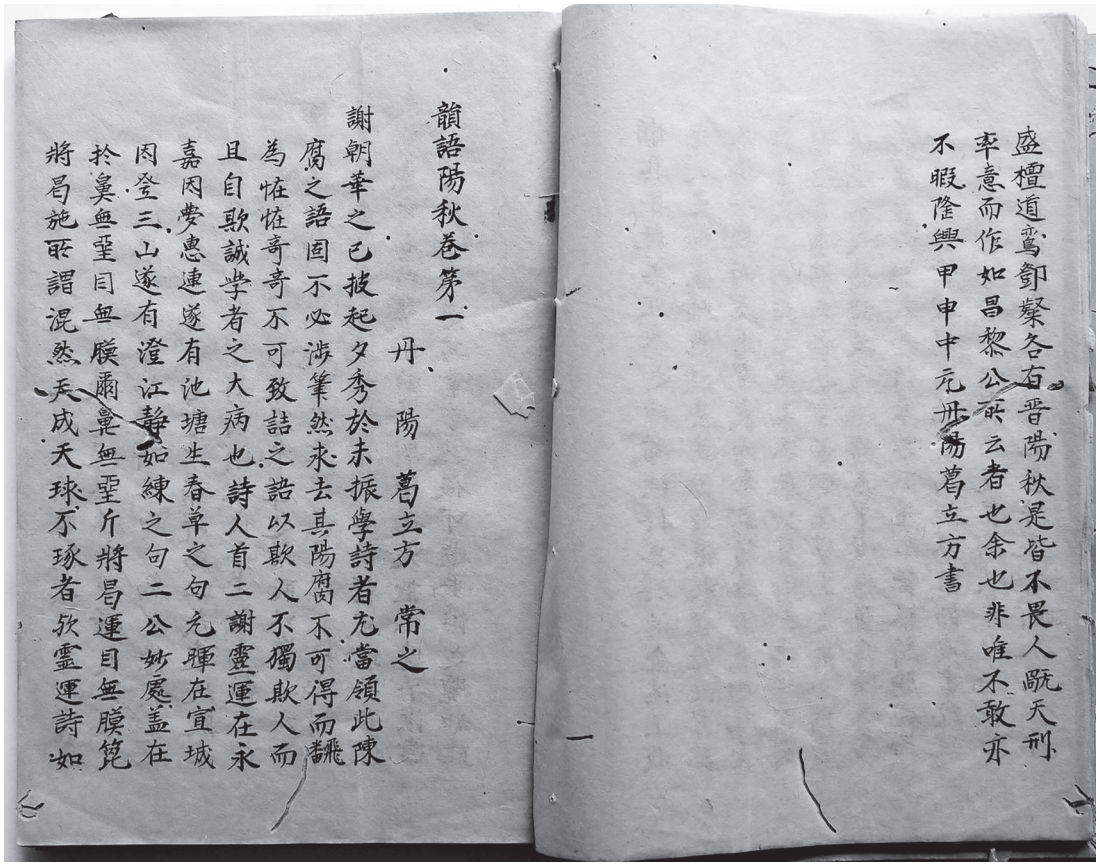
國風漢魏六朝上

張文潛云詩三百篇雖云婦人女子小夫賤隸所為要之非深於文章者不能作如七月在野至入我床下於七月已下皆不道破直至十月方言蟋蟀非深於文章者能為之邪

漫叟詩話云詩三百篇各有其旨傳注之學多失其本意而流俗狃習至不知變尚多若惟桑與梓必恭敬止謂桑梓以人賴其用故養而成之莫肯夌踐則有恭敬之道父子相與皇特如人之親桑梓今乃言父母之邦者必稱桑梓非也

朱子東萊記云山東曰朝陽山西曰夕陽故詩曰度其夕

（44）漁隱叢話


盛檀道鸞鄧粲各百。晉陽秋是皆不畏人既天刑
率意而作如昌黎公碑云者也余也非唯不敢亦
不暇隆興甲申中元丹陽葛立方書

韻語陽秋卷第一　丹陽葛立方　常之

謝朝華之已披起夕秀於未振學詩者尤當領此陳
腐之語固不必涉筆然來去其陽腐不可得而飜
為恠恠奇奇不可致詰之語以欺人不獨欺人而
且自欺誠學者之大病也詩人首二謝靈運在永
嘉因夢惠連遂有池塘生春草之句元暉在宣城
因登三山遂有澄江靜如練之句二公妙處蓋在
於冥無垂目無膜爾毫無堅斤將昌運目無膜篦
將昌施所謂混然天成天球不琢者欲靈運詩如

（45）韻語陽秋

一六・二糎）に貼附の紅色題簽の書題は家淵筆。本文は他筆。竹紙を使用。「陽／明／藏」白文方印。「新刊韻語陽秋序／正德丁卯（二年一五〇七）七月之望　都穆序」および「重梨　韻語陽秋後引　正德二年葛諶識」とある。巻四の第五葉六葉は原缺、巻三に郛子條が重複しており、重刻正德本に出る蒹葭堂寫本[22]と同系統である。

四、收藏の年代と關心

前節に紹介した諸本のうちその鈔寫の年が判明するものは多くないが、元祿七年の『千字文音決一卷』、享保七年の『畫一元龜』の二書は識語により鈔寫の年が確定でき、元祿十二年の記載がある『古今法書苑』もあまりその年を隔てないと思われる。また山科道安の日記『槐記』からは、享保六～十一年の早い時期に嘉靖本『大唐六典』を鈔寫したであろうことが推定でき、享保十一年に正德版『大唐六典』、享保十四年に『賓退錄』及び『典籍便覽』を、享保十六年に『儀禮圖式』を入手したことが分かる。『百廿詠』『李嶠雜詠〔百二十首〕』のいずれかは、正德元年將軍家宣から贈られた新寫本『李嶠雜詠』であろう。なお、家淵の關與は不明ながら寶永三年の奥書を存する『名花譜』（『居易堂清課』七種の第四册）があるが、それを含めても、寶永四年關白就任から退任後『大唐六典』の會讀を開始した享保六年頃までの間の家淵自筆の鈔本は確認できず、公務の繁忙をしのばせる。『槐記』にも、關白攝政の間の賜物は書物の代金にあて、「大方ノ大部ナル書ニテモ、サマデ御苦勞ニナラズ」（享保十一年八月三日條）とはいうものの、「一日片時モ御暇ナシ。御學問等ノコトモ、思召ノヤウニハナラズ」（享保九年九月七日條）という回想が事實であることが確かめられる。

鈔寫の傾向もまた、關白就任以前と『大唐六典』の校訂に心血を注い

だ關白退任以後とではおのずと異なっている。内大臣・右大臣であった元祿年間、元祿十二年の『古今法書苑』に先だって、「元祿五歲林鐘望日」の奥書のある外題『法書通釋』（30／2）がある。これは家凞が自ら『夷門廣牘』から書法の部分を抜萃したもので、二卷に分けられている。その他、年代不明ながら『新刊唐荊川先生稗編』卷七十八至卷八十三すなわち「文藝七　書法」の部分を抜萃した寄合い書き、他筆による『新增格古要論』の卷二至四の書畫の抜萃なども、あるいはこの頃であろうか。これら四點は、いずれも五針眼で裝丁されている。三十歲代の家凞の關心は書に多く向けられていたように感じられる。

關白退任以後は、その鈔寫年代は確定できないが、『大唐六典』およびその校訂のための法禮制度關連諸書や筆記の一群がある。『故唐律疏議』『儀禮圖式』や『經國大典』『國朝五禮義』などの中國及び朝鮮の禮法制度關係の書物に加えて『舊唐書』などの史書、また各種の筆記も『大唐六典』校訂に用いられたものであろう。『典籍便覽』が堀正脩によってもたらされているように、こうした書物は、六典の會讀に參加した儒者の堀や松下、禪僧の百拙元養や九峰元桂、侍醫の山科道安ら近衞家の諸大夫などが、それぞれに、またその關係先から集めたものも少なくなかったと思われる。新井白石が獻呈した影鈔嘉靖本『大唐六典』のほかに、林羅山手校本『革節卮言』や、林家本のみ所藏が確認できた『漁隱叢話』の鈔寫にも、白石もしくは將軍家宣の關與が考えられる。さらに自筆鈔本では、近世以後の海外への關心および交流を示す一群、具體的には『靖臺實錄』『使琉球錄』などの臺灣・琉球情勢に關連する諸本と、ほぼ同時代資料であった康熙帝の『聖諭』『〔康熙帝〕御製闕里檜賦　附御製竹賦』『清朝詩』が目をひく。これらは政治の機微に觸れる可能性があったために他に寫させず自ら筆をとったものか。いずれも底本不詳だが、『使琉球錄』に白石手筆本があることは先に記載した。したがってこれらはあるいは關白退任から閒もない閒に鈔寫したものかもしれない。新井白石は幕府にあって各種儀禮の整備に當たり武家の制度に通じていたほか、朝鮮通信使と禮儀について論爭し、また海外情勢に關心を抱いていた。家凞もまた朝廷の立場で海外に關心を寄せていたのではないだろうか。他筆の『新刻增校切用正音鄉談雜字大全』や『廣東新語』、『坤輿外記 七奇圖說』など、また寄合い書きの『東遊草』、その他ここに紹介できなかった抜萃本『全浙兵制考　附日本風土記』などにもその姿勢が窺われる。

以上、四十五點の鈔本を紹介した。底本を確定できるものが少なく、また記述に精粗があるのは筆者の力不足によるものであり、御示教を待ちたい。從來、殊に漢籍研究において近世の鈔本はあまり重視されてこなかった。しかしここに見るとおり、孤本である『千字文音決』やその可能性が高い『新刻增校切用正音鄉談雜字大全』『紹興校定經史證類備急本草畫圖二十卷』『白毫庵詩』など、また現在一般的ではない系統の『文章緣起註』や『漁隱叢話』、宋刊本の系統にあると思われる『海錄碎事』や『賓退錄』、元刊本による『書史會要』など、その底本は現在では稀覯である。また家凞の鈔寫の後に散在した『畫一元龜』がそろっているのも貴重である。家凞の目で選ばれた、これら鈔本の價値の高さは言うまでもない。また、貸借をはじめとする書物の交流からは、家凞をかなめとして、京の公家・儒者・僧侶等の人的ネットワークと、幕府及び江戸の儒者のネットワークとが交叉していた様子もおぼろげながら窺えたが、今後の課題としたい。

末尾になったが、大學院進學を前にお伺いして以來、閲覽を快くお許しくださり、この度も書影の掲載をご許可くださった財團法人陽明文庫理事・文庫長、名和修先生に厚く御禮申し上げる。そして一九九八年以來陽明文庫の漢籍調査をともにし、多くのご指導を賜った芳村先生に深

く感謝し、今後のご活躍を祈念する次第である。

注

① 數字は、『京都大學附屬圖書館六十年史』第三章 圖書の運用、第三節 藏書（京都大學附屬圖書館ホームページ）による。

② 田島公編『近衛家名寶からたどる宮廷文化史――陽明文庫が傳える千年のみやび』、Ⅳ1、芳村弘道「陽明文庫の漢籍――優品三十六點を嚴選解說」（笠間書院、平成二十八年）、また拙文「漢籍善本紹介－陽明文庫（一）～（四）」（『新しい漢字漢文教育』第二十八～三十一號（研文社）一九九九～二〇〇〇年）は、どちらも書影を掲載しているので、參照されたい。

③ 前掲書『近衛家名寶からたどる宮廷文化史』、Ⅳ2、島谷弘幸「近衛家の書跡――その價値と魅力」の四「近衛家凞（豫樂院）と書」參照。

④ 『近衛家凞公遺墨展覽會目錄』（京都博物館、一九三五年）（國會圖書館デジタルコレクション）。

⑤ 池邊義象「陽明家の藏本」には「豫樂院殿ハ、實に大文豪なりき、右藏本の中に、自ら書寫せられたる者少なからず、中にも、宋文鑑目錄三冊 太平御覽目錄四冊 稗海要錄一冊 法書類纂一冊 百家名書錄二冊 佩文齋廣羣芳譜廿五冊 の如き、或ハ細楷、或ハ行書、その筆迹の正しく美（ウルハ）しきこと、今の世に並ぶべき者なく、古人にも多くハ得られざるべし」とある（『如蘭社話』卷四十七、明治四十五年三月）。家凞の鈔本についての數少ない言及であるが、書として鑑賞されたことが窺える。如蘭社については深萱和男「資料紹介『如蘭社話』」（『名古屋大學國語國文學』第四號、一九六〇）參照。

⑥ 元和七年銅活字版敕版『皇朝類典』を印行し、宮中行事の復興に取り組み、京の諸藝能を發展させた院が晩年最も親しんだのが常子內親王で、家凞は生まれて間もない九月に母に連れられて參上したのを最初として、延寶八年八月に院が崩御するまでしばしば面會している。

⑦ 新井白石は、家宣・家繼の將軍宣下の儀式にも參列している。

⑧ 綠川明憲「江戸時代の公家は本當に貧乏だったのか？――近衛家凞を支えた經濟力」（『三田國文』四十二、二〇一五年十二月）、また『豫樂院鑑』二一一頁參照。

⑨ 前掲「近衛本『大唐六典』の板行と京儒のかかわり」參照。新井白石獻呈の鈔本は京都大學近衛文庫に所藏されている。その末尾に「寶永庚寅（七）歲季冬日／攝政家凞志」の識語があり、一見して意氣投合した白石に『大唐六典』を捜索しているが購入できないでいることを話したところ、白石が以前手寫したものを贈ったことが記されている。

⑩ 角田多加雄「六諭衍義大意前史――六諭衍義の成立と、その日本傳來について」『慶應義塾大學大學院社會學研究科紀要：社會學心理學教育學』二十四、一九八四年。高津孝「琉球における書物受容と教養」（『琉球 交叉する歷史と文化』勉誠出版、二〇一四年）に書影を掲載する。

⑪ 水戸藩との書籍の交流記事も多い。後水尾院の實弟でもある家凞の曾祖父信尋の娘の尋子は、水戸光圀に嫁いでおり、近衛家と水戸藩とは姻戚關係にある。

⑫ 『豫樂院鑑』によれば、長崎經由の舶載書籍については、京都在住の長崎商人日野屋喜右衛門が取り次ぎ、享保七年（一七二二）五月二十一日、銀九貫目で彼から「唐本藏經」を購入。享保九年（一七二八）五月十九日には清國より新たに舶載された書籍の目錄が到來している。八月二十日、明・謝在杭舊藏の『集韻』を入手。享保十一年（一七三〇）には、清國より舶載された『陸氏全書』八十冊および『黃帝內經類纂約註』、清・汪昂撰の『本草備要』を購入。十二月五日頃、正德本『大唐六典』を入手。これらの記錄から、彼が出入りするようになったのは享保以後と考えられる。

⑬ 拙論「『槐記』にみえる近衛家凞の讀書生活」（『和漢比較文學』創刊號、一九八五年十月）。

⑭ 『大唐六典考訂』の完成は、元文四年十二月二十八日、まず廣島藩へ通知されている。

⑮ 高橋俊和「近衛本『大唐六典』の板行と京儒のかかわり――元文四年十二月藏板成就說」（『國語國文』第七十五卷第九號、二〇〇六年、『堀景山傳考』和泉書院、二〇一七年に再收）。

⑯ なお家凞は、しばしば白居易の詩や、歐陽脩や蘇軾の賦等の名作を臨書したり贈ったりしているが、書作品として書かれたもの、また法帖や佛典については調査が及んでいない。

⑰ 藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究　史部』（東國大學校、二〇一八年、九六四～九六五頁）「史１９２３」に詳細な紹介がある。

⑱ 前掲『日本現存朝鮮本研究　史部』「史１７２５」（八八三～八八四頁）參照。

⑲ 『槐記注釋』（立命館出版部、一九三七年）による。高橋俊和氏の前掲「近衞本『大唐六典』の板行と京儒のかかわり」および「堀景山（正脩の從弟）小傳」（『鈴屋學會報』第十六號、一九九九年、『堀景山傳考』に再收）に、堀正脩の學統が述べられている。

⑳ 山崎明「百二十詠詩注解題」（『斯道文庫論集』第五十號、二〇一五年）に詳細な紹介がある。

㉑ 慶應義塾大學展覽會『本の蟲本の鬼』カタログ（慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫・慶應義塾大學アート・センター、二〇一九年六月）の８『漁隱叢話前集六十卷後集四十卷』の解說（住吉朋彥執筆）參照。

㉒ 芳村弘道「『韻語陽秋』の傳本について」（『學林』第十一號、一九八八年十一月、『唐代の詩人と文獻研究』中國藝文研究會、二〇〇七年に再收）。

（東海学園大学人文学部教授）